

畿央大学

健康科学部

人間環境デザイン学科

第17回 卒業制作・論文作品集

卒業制作・論文作品集 17

畿央大学健康科学部
人間環境デザイン学科
2022

The 17th Graduation Works & Theses
Department of Environmental Design
Faculty of Health Sciences
Kio University

ご挨拶

第17回卒業制作・論文作品集には、この春卒業する人間環境デザイン学科の卒業制作と論文の作品が収録されています。

大学での学びは、コロナ禍により従来とは大きく変わりましたが、そのことにより、デザインする過程において直接体験が重要であることがより鮮明になったと思います。

デザインの対象を表現するときは、バーチャルな仮想空間と物理的な現実空間を融合した世界に、ありたい姿を描きます。その姿は飛躍的に進化しているAIを利用することで完成度が高くなります。卒業生の作品や論文には、そのような技術革新が反映され、プレゼンテーションでも仮想と現実が共存していました。

デザインの出発点は、現実の社会を調査することですが、その調査には現実空間で生活している人とのコミュニケーションが重要であり、それは直接対話すること、生活空間に身を置きその社会を取り巻く自然環境を全身で感じる必要があります。これはAIでは難しいことです。

卒業される皆さんは、政治経済が世界規模で転換する未来社会の中で、幅広いデザインの分野で活躍されることになります。AIに負けない感性・知性を磨き続け、表現力を高め、さらに成長されることを期待します。

何年か先にこの作品集を開くことがあれば、その時にはご自身が成長したことを確信され、同時に学友の顔を懐かしく思い起こすでしょう。

最後に、卒業に至るまで皆さんのお一人おひとりの個性を尊重してご指導いただいた先生方にお礼を申し上げますと共に、卒業後も引き続き良き絆を保たれることを願ってご挨拶いたします。

畿央大学 学長

冬木 正彦

入賞論文・制作

- | | | | |
|----|-----|-------|---|
| 8 | 学長賞 | 堀口 真生 | 縮小時代における商店街の将来ビジョン ～本町通商店街を事例として～ |
| 12 | 優秀賞 | 西岡 祐大 | R.A.Vu. 奈良学生寮 ～ faulty of Real Architecture the Virtual university 奈良学生寮～ |
| 14 | 優秀賞 | 門田 真奈 | 仏像にふれる ～仏像に触れる、学ぶ、知る～ |

卒業制作

- | | | | |
|----|--|---------------|---|
| 18 | | 角谷 桜 | 泊まれる図書館 |
| 19 | | 石田 菜織 | 書道と歩む物語 一長年続けてきた書道を作品にー |
| 20 | | 井戸上 希星 | モノの組み合わせ・転用の工夫 |
| 21 | | 畝森 初音 | Triangle hut ～新しい小屋のカタチ～ |
| 22 | | 大井 嵩士 | 窓際の一畳スペースを居心地のいい場所に ～椅子と机と整理棚でできること～ |
| 23 | | 大柿 衛 | 糸・泥・布・人・史 ～奄美大島にて～ |
| 24 | | 大下 恵莉 | 災害体験館 |
| 25 | | 大森 鈴実 | Symmetric single armchair |
| 26 | | 小柳 なつみ | よし、良し、葦 一葦のある暮らしー |
| 27 | | 加藤 二千栞 | WHITE DESK ～これひとつで生活を豊かに～ |
| 28 | | 金岡 梨桜 | nana |
| 29 | | 島本 侑奈 | 佐賀錦を日常に ～レトロとモダンの融合～ |
| 30 | | 白石 望友 | 海のホカンス |
| 31 | | 吹田 絹果 | 福島駅広場 ～梅田トライアングルの第三拠点：うめにし広場～ |
| 32 | | 曽根 勇弥 | 見える議事堂 |
| 33 | | 竹田 光花 | 萩の景観をいつまでも |
| 34 | | 月岡 菜桜 | 学校から学び舎へ |
| 35 | | 辻澤 未来 | 夢洲の屋根 ～晴雨対応スポーツ練習場～ |
| 36 | | 殿村 梨花 | Recombination furniture |
| 37 | | 豊田 純菜 | 靴下から出る残糸活用の第一歩 |
| 38 | | 中井 竜大
西田 瞬 | 地元五條土産店の居場所作り |
| 39 | | 中畠 信介 | 桑染めの魅力 ～身近な天然繊維を使って～ |
| 40 | | 中多 彩歌 | 衣服再生 ～着古してなお、お気に入り～ |
| 41 | | 永田 貴哉 | PLACE OF LIFE AND WORKPLACE SPREAD OUT FROM ONE BOX |
| 42 | | 西浦 奈々帆 | 格子の棚 ー現代の生活に取り戻す和の空間ー |
| 43 | | 畠中 詩奈 | 離島タウンステイ |
| 44 | | 東田 遥香 | 大川を漕ぐ |
| 45 | | 福岡 愛実 | 香紅 ～思いのままに～ |
| 46 | | 藤木 花歩 | ペランダを庭に |
| 47 | | 水口 大樹 | HASHIMOTO BASEBALL PARK ～芽を育て、輪を繋ぐ。～ |
| 48 | | 山口 瑞生 | 千五百秋 ～ちいほあき～ |

49	山田 茜	tsutsui PLAZA
50	武井 穂香	組み立て式の遊具 ～自分好みのデザインに～
卒業論文		
52	笠島 拓真 米田 雄人	高齢者の生活実態からみた環境調整行動を促す介入 ー奈良県農村部を事例としてー
53	後宮 尽我	建築家岡田孝男の茶室研究における独自性
54	禱 開斗	夏季における室温と好まれる気流
55	植山 真智 松村 理菜	近くて遠い隣まちから、ちょっと知っている隣まちへ ～竹馬★クイズラリーを事例として～
56	大本 棕星 辻 大輝	睡眠アプリと睡眠計測器の特徴に関する一考察
57	奥野 皓晴	中小企業振興基本条例に基づく取り組みの系譜 ～広陵町を事例として～
58	金子 颯汰	昭和戦前期における国風照明器具の形成過程に関する研究
59	川上 伊純	多世代交流拠点の持続可能な運営に関する活動報告 ー3年目のきらきら☆ステーションを事例としてー
60	北 彩乃	小屋の活用事例および小屋に対する利用意識に関する研究 ～小屋のある暮らしの現状と将来～
61	久米 亜衣子 三浦 百々香	今井町及び大和八木駅周辺における景観色彩に関する研究 ー自動販売機を中心としてー
62	小谷 芽未	橿原市今井町における共同制作緑帯の使用状況および着座行動の実験に関する研究
63	近藤 雄哉	一戸建て住宅におけるインナーバルコニーの 設置実態と類型に関する研究
64	後藤 文太 志村 明則	若年者における香りやにおいに対する個人差
65	佐々木 柊真	生活行為の違いによる好ましい照明環境の照度と色温度
66	中島 由圭莉	新型コロナウイルス感染症の自治会活動への影響
67	中村 理紗 西尾 幸記	非営利活動における後継者確保への挑戦 ー広陵町健康農業を事例としてー
68	堀士 修平	身の回りの外遊び場及び遊び方の変化に関する研究 ～京都府山城地区の世代間を対象として～
69	増井 駿	集落の教科書の作成
70	松原 由生	壁紙のテクスチャーに関する研究 ー大学生の部屋を例としてー
71	室 二葉	Webサイトのメイン画面における利用意向に関する研究
72	物部 優香	コミュニティを活かした空き家の適正管理の研究
73	八島 美来	生駒駅南地区における旧公設市場の位置づけとその建築的特徴
74	山本 陽菜	インターネット販売におけるドレープカーテンの見せ方と色彩に関する研究
75	吉川 理那	重ね色目から受ける季節感に関する研究
76	吉田 流奈	ネット販売における文庫本の表紙に関する研究 ーベースカラーを中心にー

入賞論文・制作



縮小時代における商店街の将来ビジョン ～本町通商店街を事例として～

堀口 真生
Mao Horiguchi

清水ゼミ

〈目的〉

本町通商店街のある桜井駅周辺は、奈良県桜井市の玄関口であり、商業・サービス機能促進地域として計画されている。しかし、商店街は商店がまばらに広がり、衰退が著しい。そこで本研究では、本町通周辺の土地利用の変遷を確認した上で、現在の商店主の意識調査を実施し、今後の本町通商店街周辺の、土地利用のシミュレーションを行うことで、5、10、20年後の将来像を把握することを目的とする。

〈方法〉

- ① 土地利用の変遷を、ゼンリン住宅地図を元に色分けし、確認する
- ② 本町通商店街の建物、土地所有者に対し、表1の要領で調査を実施した。

表1 所有者調査概要

対象	本町通商店街の建物、土地所有者の68名（有効回答数46名）
期間	2022年12月
手法	訪問でのヒアリング調査
調査内容	商店主の年齢、従業員数、現在の住まい、居住形態、住商分離の補助金について、5,10,20年後の営業・住まいについて、10年後の本町通商店街について

〈分析〉

【土地利用の変遷】

初めに、1970年から2022年までの3年毎の変遷を土地利用別に色分けして記した。周囲の大規模店舗や遊戯施設との密接な関係性の中で、本町通商店街は住宅化してきたことが明らかになった。（図1-1,1-2）元々商店だったところが廃業後、空き家となり、のちに解体されて住宅になるプロセスが多くみられた。（図2）これらの調査をもとに、桜井市の人口推移と駅前の特筆点と照らし合わせながら駅前の土地利用を分析すると、4つに分けられることが分かった。（図3）



図2 住宅化のプロセス

【所有者の意向調査】

次に、本町通商店街の土地の所有者に対して、今後の商店の営業や土地利用の予定を調査したところ、下記の2点が明らかになった。

- 10、20年後は半数以上が商店を営業していない。
- 10年後の商店街に対して、所有者全体の半数以上で、住宅街になることを望んでいた。

【シミュレーション】

所有者調査を基に、商店街の土地利用の将来像についてシミュレーションを行った。シミュレーションの条件は下記の通りである。

シミュレーションの条件・限界

- 商店街全体を100%として、その割合を示す。
- 未回答の部分は変化しないと仮定する。
- 100個の正方形のビジュアルを基に使用し、現状を基準として昭和45年、平成11年、現状、5年後、10年後、20年後、どのように変化するのか視覚的に表現する。
- 表示する面積と実際の商店街の土地利用別の面積比とは一致しない。
- 環境の美化、観光プロモーションによる効果、その他経済状況は反映していない。

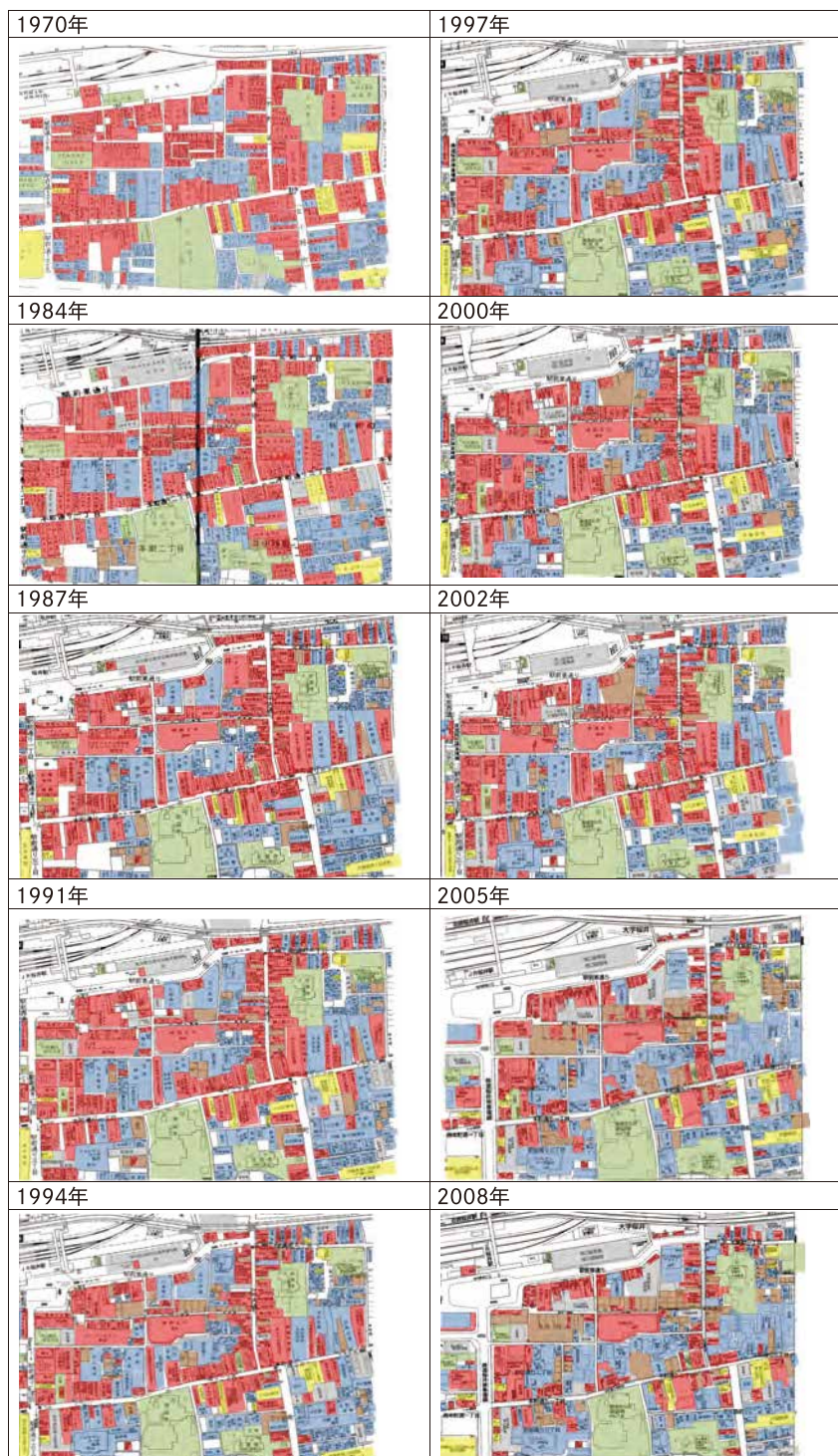


図1-1 1970年から2008年までの桜井駅前の土地利用の変遷（色の凡例は図1-2参照のこと）

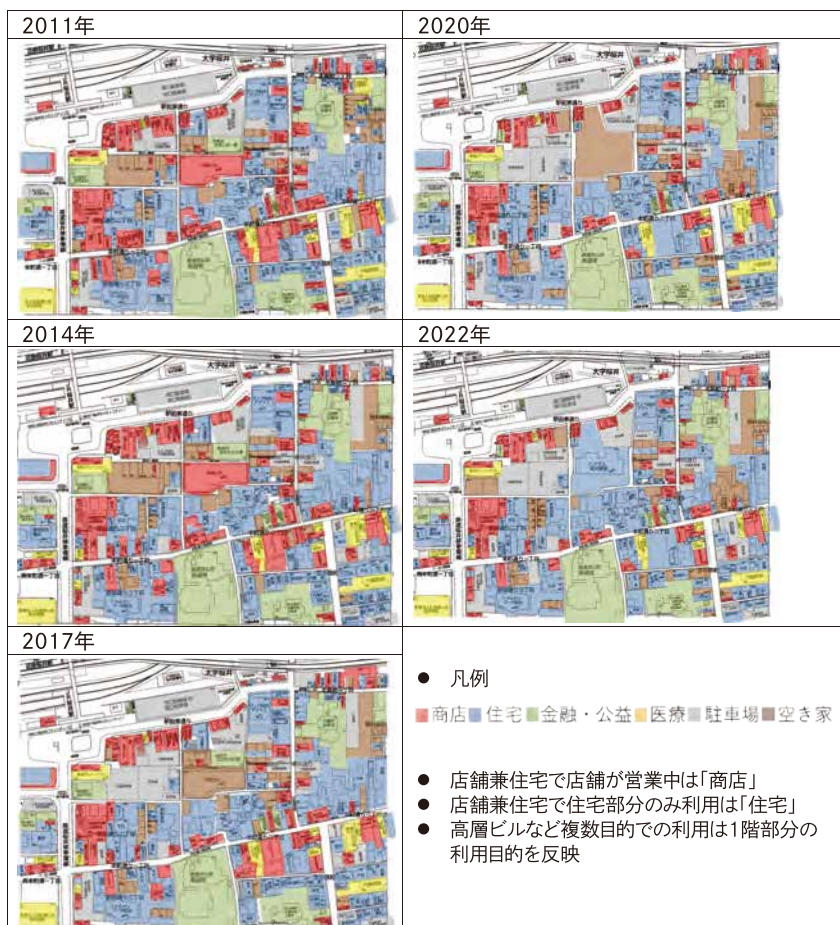


図1-2 2008年から2022年の桜井駅前の土地利用の変遷



図3 桜井市の人口推移と特筆点

シミュレーションの結果を図4にまとめた。商店街全体で分析すると、ここ20年ほどで急激に住宅化が進んだことがわかる。また、今後、徐々に青い住宅地が広がっていくことが分かった。さらに、商店街の地域毎に本町通一丁目から三丁目までを分けて分析したところ、本町通一丁目の変化は今後もあまり見られなかったものの、特に本町通二丁目、三丁目は、今後は、現在の店舗のほとんどが住宅化していくことが明らかになった。

〈まとめ〉

桜井駅は交通の結節点であり、都市計画では、桜井市の都市機能を果たす重要な場所と位置付けられている。しかし、現在の所有者の意向を基にしたシミュレーションからは、商業の集積地としての役割を期待されている本町通商店街が、その機能を十分に果たし続けることは難しいということが明らかになった。都市機能の誘導が十分に行えない理由一つに、古くから商店街の集積地であるという特性により、所有者が細分化し、決定権をそれぞれが持っており、その各が商業の集積地としてではなく、住宅地とし

ての将来を望んでいることが挙げられる。今回の調査では、本町通商店街の所有者からは、桜井市の都市機能を果たす必要な地域である。

今回は、本町通商店街の所有者のみへの意向調査を行ったため、駅利用者や商店街以外の事業者など様々な角度から本町通商店街が求められる将来像を明らかにするまでには至らなかった。

今後は、今まで自分が都市の一員であるとして「考えてこなかった普通人」の意向も取り入れた話し合いの場として「みんなでまちの将来を考えるプラットフォーム」を設立し、都市計画に関するリスクリングの機会が必要ではないかと考える。

更に、今回様々なデータを集めて分析を進めたが、地元図書館で昔の地図は求められず、地元産業のデータも十分ではなかった。まずは、オープンデータ化の充実を図った上で、それにより「少しだけ都市計画に興味がある普通人」の発想力・実行力を生かせる機会を創出することも必要だと思う。また、住民の貴重な声もオープンデータとして残してほしい。

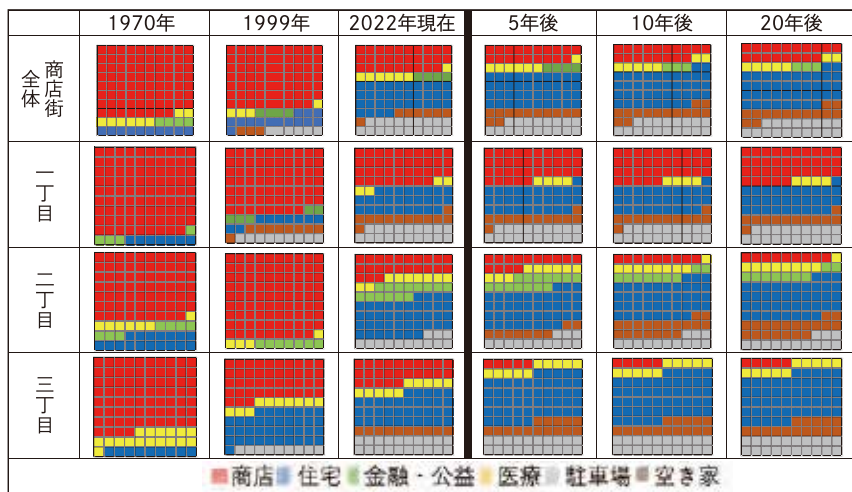


図4 これまでの推移とシミュレーション結果

受賞のことがば

この度は、最優秀賞を頂きましたことを大変嬉しく思います。
何度も相談に乗ってくださった清水先生、そしてゼミ室と一緒に頑張ったみんなには感謝の気持ちでいっぱいです。



R.A.Vu. 奈良学生寮

～ faulty of Real Architecture the Virtual university 奈良学生寮～

西岡 祐大

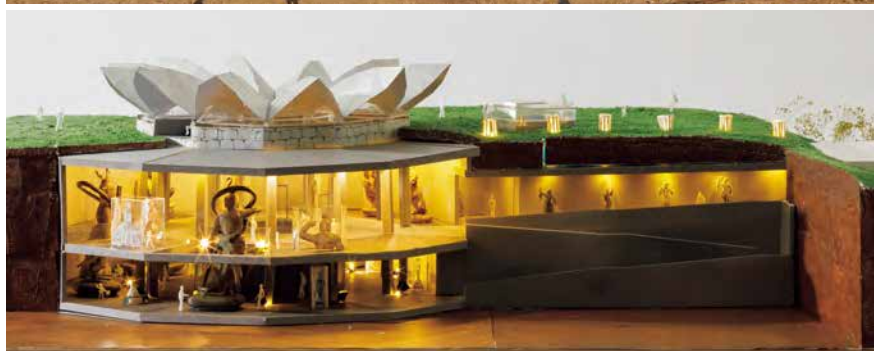
Yudai Nishioka

藤井ゼミ

ミネルバ大学のような、オンライン上で授業を行う大学に建築学部が設置されることを想定した。学生たちはミネルバ同様世界各地にて寮生活を送るが、本計画はその日本寮を考えたものである。

プログラムには生活の場以外に実物・実空間の制作や展示の場を取り入れ、建築形態には日本伝統建築のメタファーとして唐招提寺金堂の三手先斗供を参照した。





仏像にふれる ～仏像に触れる、学ぶ、知る～

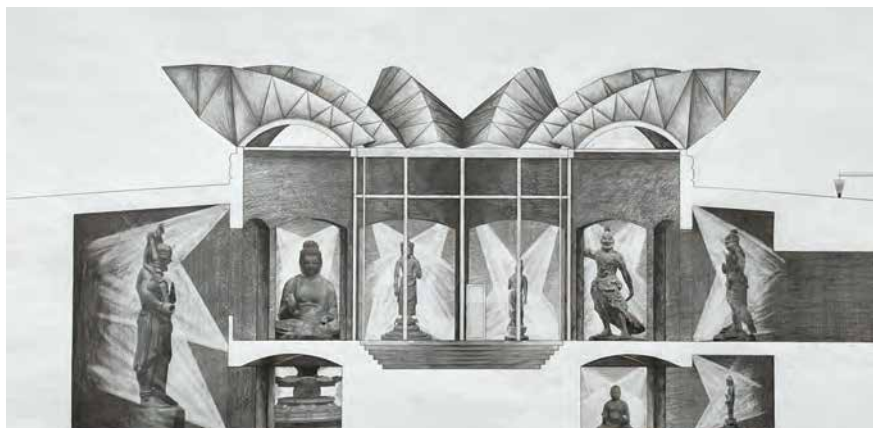
門田 真奈
Mana Kadota

三井田ゼミ

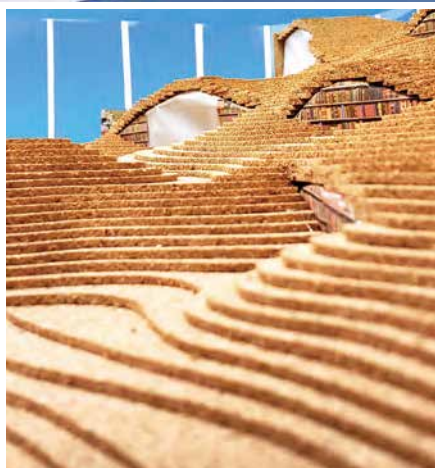
仏像に触れることで仏教美術を身近に感じ、興味を持ってもらえるように仏像美術館、修復センターを計画。

これまで公園に訪れなかった人々を呼び込める施設を併設することで高塚地区公園の魅力を高めたい。

公園の丘に建物を埋めることで、公園としての利用もできる。



卒業制作



泊まれる図書館

角谷 桜

Sakura Sumitani

藤井ゼミ

「本を読みながら寝落ちたい」「図書館や本屋で一日中本を読み続けたい」という願望を叶えるための図書館。
読む場所を制限せず、どこでも、自分の思う態勢で本を読むことを目的とする。



書道と歩む物語 ー長年続けてきた書道を作品にー

石田 菜織
Naori Ishida

村田ゼミ

長年続けてきた書道を、作品として形に残す。

今まで生み出してきたたくさんの書き損じ半紙は、もったいないと感じつつもほとんど廃棄してきた。それらを何かに使うことができないかと考え、書き損じ半紙を紙糸に変え、衣装制作を行う。



モノの組み合わせ・転用の工夫

井戸上 希星
Kirari Idoue

前川ゼミ

SDGsにより「つくる責任・つかう責任」が問われる現在、1からモノを作るのではなく、モノの組み合わせや転用で、既にあるものをどう活かすか、といったデザインのアプローチが必要と考え、計17個モノを制作しマニュアル本を制作した。



Triangle hut ～新しい小屋のカタチ～

畝森 初音
Hatsune Unemori

前川ゼミ

近年日本で広がりつつある「タイニーハウス」
しかしこれまでも地域的・時代的な要求により様々な小さな建築は造られてきている。
それらを分析、現在におけるタイニーハウスの意義・可能性を明らかにし、
その見解を基に全く新しい「タイニーハウス」を提案する。



窓際の一畳スペースを居心地のいい場所に
～椅子と机と整理棚でできること～

大井 嵩士
Takashi Ooi

林田ゼミ

どの家庭にもあるような一畳スペースを居心地の良い場所にしたいと思い、
自宅のくれ縁をモデルケースに「窓際の一畳スペースを居心地の良い場所に」をテーマとして
書院の定型より机と棚、椅子座の生活より椅子の3点を制作しました。



糸・泥・布・人・史 ～奄美大島にて～

大柿 衛
Mamoru Ogaki

村田ゼミ

鹿児島県の奄美大島に脚を運び、大島紬について染の工程の研究を行いました。
ベストは泥とシャリンバイで染めた糸で織り、コートは泥と藍で絞り染めを施した布で
制作しました。



災害体験館

大下 恵莉
Eri Oshita

藤井ゼミ

地震、津波、台風、火災…我が国は災害大国だ。

誰もが、いつどこで災害に遭ってもおかしくない。

災害時に何よりも大事なのは自らの命を守ることだが、机上の知識だけではいざというとき役に立たない。

災害を知り、災害を体験し、身の守り方を経験する、災害体験館を計画した。

建築は中央に押し寄せる津波の形を置き、渦巻く風をイメージしたうねる三枚のコンクリートでそれを取り巻いた。

この形は、災害そのものの表現であり、災害に負けない建築の強さの表現でもある。



Symmetric single armchair

大森 鈴実
Remi Omori

三井田ゼミ

家で過ごす中で一つの椅子に対して一つの役割しかないものが多いと感じた。
また、街中や家において片肘掛けの椅子が少ないと感じた。
そこで片肘掛けの椅子かつ様々なシチュエーションで使用する事ができる椅子を提案する。



よし、よし、葦 ー葦のある暮らしー

小柳 なつみ
Natsumi Oyanagi

村田ゼミ

ヨシ系のやさしい風合いと、葦の葉の鮮やかな染色を活かした衣服を制作。
生活様式の変化で衰退していった葦を、暮らしの中で長く使ってもらえるような衣服にすることで、
葦の良さを伝えていきたい。



WHITE DESK ～これひとつで生活を豊かに～

加藤 二千栞

Nichika Kato

三井田ゼミ

コロナ渦に伴ってより必要となったパーソナルスペースの確保。
長期的に使用することのできる女性をターゲットとして幅広い世代に対応することのできる
ドレッサーデスクを制作しました。



nana

金岡 梨桜

Rio Kanaoka

前川ゼミ

コロナ禍でステイホームが謳われ、インテリアへの関心が高まった一方、仕事場とプライベート空間のメリハリがつきにくくなった令和。

1つの家具を使い分ければ気分転換ができると考え、二面性を持つ機能的かつ快適な椅子の提案

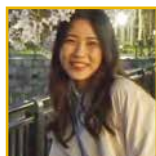


佐賀錦を日常に ～レトロとモダンの融合～

島本 侑奈
Yuna Shimamoto

村田ゼミ

伝統工芸である佐賀錦で普段使いが可能なバッグ
昔ながらの佐賀錦の技法やデザインを、今風なアイテムと組み合わせることで
レトロとモダンが融合したアイテムの制作
カジュアル、フォーマルに使い分けることが可能で、持ち手なども取り替え可能



海のホカンス

白石 望友
Miyu Shiraishi

藤井ゼミ

- ・海中で過ごし、海上で過ごし、海や魚や空を眺めたい。
- ・魚たちと共に泳ぎ、魚たちと共に食し、魚たちと共に眠りたい。
- ・海に差し込む日の光で目覚めたい。
- ・建築は船であり、海に浮かび、湖と共に漂う。



福島駅広場 ～梅田トライアングルの第三拠点：うめにし広場～

吹田 絹果
Kinuka Suita

藤井ゼミ

JR福島駅前は狭く汚い。また、駅の南北は高架橋により分断されている。この高架下に、駅の南北を繋ぐ広場を設け、ハイカルチャーや商業を呼び込み、「うめきた～大阪駅～福島」の新たなトライアングルを創ろうと考えた。線路とホームをアーチ橋の吊り構造とすることで、広場を無柱化した。



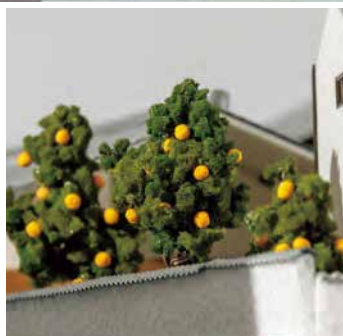
見える議事堂

曾根 勇弥

Yuya Sone

藤井ゼミ

東大阪市役所議会の改修案、議会と市民相互の可視化の提案。
市民は広場から議会が見え、議員は審議の最中に市民の反応が見れる。
「市民の、市民による、市民のための政治」の実現の場。



萩の景観をいつまでも

竹田 光花
Mika Takeda

三井田ゼミ

萩のまちなみや風景、萩で過ごしたすべてが好きだ。
重伝建地区内の10年以上空き地となっている元実家跡地で、
萩に欠かせない夏みかんとともに生業暮らし。
視覚だけではなく、五感すべてで萩を感じてほしい。



学校から学び舎へ

月岡 菜桜
Nao Tsukioka

三井田ゼミ

現在の中学校にある課題を改善し、生徒や教職員がよりよい学校生活を送ることのできる場所とするために計画した。

- ・生徒や教職員などの交流を推進する学校
- ・安心安全で生徒・教職員が過ごしやすい学校
- ・生徒一人ひとりの居場所がある学校をつくろうと考えた。



夢洲の屋根 ～晴雨対応スポーツ練習場～

辻澤 未来
Miku Tsujisawa

藤井ゼミ

アマチュアスポーツ練習場・合宿場の計画

練習場には、簡易なテントの屋根をかける

テントは二重、三重に重なり、自然光が入り、風が抜ける

荒天時には雨を遮り、灼熱時には気流が涼しさを呼ぶ

合宿場はコート脇に分散配置され、その屋根は小さな観覧席となる



Recombination furniture

殿村 梨花
Rika Tonomura

前川ゼミ

時代に合わせて発展してきた木組み技術を、使用者が自由自在に組み替え、多目的に使用できる展開・転用可能な構造をデザイン。子供から大人まで、利用者に合わせてさまざまに組み替えられ、成長に合わせて長く使用し続けられる。



靴下から出る残糸活用の第一歩

豊田 純菜
Junna Toyoda

村田ゼミ

広陵町の靴下会社で製造工程時に発生する「残糸」。
その糸は、綺麗でありながら破棄されている。
本研究はその残糸を活用する第一歩である。

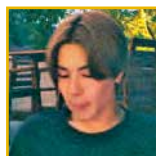


地元五條土産店の居場所作り

中井 竜大 西田 瞬
Tatsuhiro Nakai Shun Nishida

陳ゼミ

地元五條市にあるこんびら館という土産店において、
新たに椅子とサイドテーブルを作り、休憩のクオリティを上げたい。
土産店の一角に設置することによって、利用者と地元の居場所になれるように期待している。



桑染めの魅力 ～身近な天然繊維を使って～

中畠 信介
Shinsuke Nakajima

村田ゼミ

繊維について多くのことを学んだ。

その中でも天然繊維に興味を持ち、夏は綿、冬は羊毛というように自分自身が最も身近に感じる素材を選んだ。

綿、羊毛を糸に紡ぎ桑の実、桑の葉で染め、織り、衣装を制作した。



衣服再生 ～着古してなお、お気に入り～

中多 彩歌
Ayaka Nakata

村田ゼミ

今日衣服は大量生産・大量消費され、衣服の廃棄は世界的にも早期改善が求められる難題となっている。補修を目的とするダーニング刺繍やパッチワーク、裂き織りを用い、そのアイデアを付加価値として形にしたリメイク古着を提案する。



PLACE OF LIFE AND WORKPLACE SPREAD OUT FROM ONE BOX

永田 貴哉
Takaya Nagata

林田ゼミ

- ・持ち運びができるというモバイル性の高いインテリアエレメントを考え、モバイルワーカーがパソコンを置き、Wi-Fiに繋ぐことで、どこでもすぐに仕事や生活を始められるものにする。
- ・巨大なパーテーションにより、他の空間との差別化や、綺麗な模様と光によって癒しを得ることができるインテリアエレメントにする。

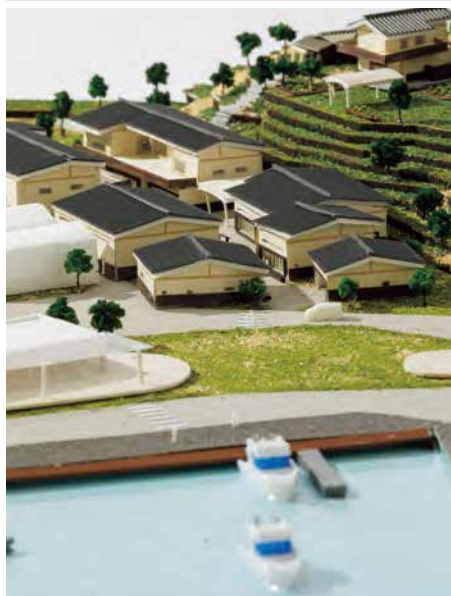


格子の棚 ―現代の生活に取り戻す和の空間―

西浦 奈々帆
Nanaho Nishiura

三井田ゼミ

古くから慣れ親しまれてきた「和の空間」は現代の暮らしから失われつつある。昔ながらの町家では必ず目にする「格子」に着目し、現代の暮らしになじみつつもどこか懐かしい町家のファサードがイメージされる棚を目指した。



離島タウンステイ

島中 詩奈

Utana Hatakenaka

林田ゼミ

祖父母との思い出が残る特別な場所、奄岐島で新しい家族のカチを提案する。
島外から来た人と島の人たちとの交流、島の人たち同士の交流によって、
人と人とのつながりが感じられる⇒世代や血縁関係を超えた暮らし



大川を漕ぐ

東田 遥香

Haruka Higashida

林田ゼミ

櫻宮に守られるこの地にレガッタボートの聖地を計画する。

ここにはレガッタを漕ぐ人たちが集い、
レガッタボートという水上アクティビティを通して
この地に眠る水上文化・魅力に触れることができる。



香紅 ～思いのままに～

福岡 愛実
Manami Fukuoka

村田ゼミ

幼少期から身近にあった月ヶ瀬の烏梅。

化学染料の輸入により現在、日本でたった一軒となった烏梅農家で烏梅の歴史、製法を学ぶ。

化学染料を一切使用しない、失われつつある本物の紅の美しさを求めて、烏梅の伝統と紅花染め、絹に触れる。梅の花のように、思いのままに鮮やかな紅色を散りばめた作品となった。



ベランダを庭に

藤木 花歩
Kaho Fujiki

三井田ゼミ

ベランダという空間は、どの家も似たような使い方をされており個性がないと感じていました。私は庭があることに憧れを感じていることから、ベランダのスペースをうまく利用し、戸建て住宅に負けないような庭空間を提案したいと思いました。



HASHIMOTO BASEBALL PARK

～芽を育て、輪を繋ぐ。～

水口 大樹
Daiki Mizuguchi

陳ゼミ

このBALL PARKを通じて人と人との輪が繋がっていき、
また野球に関わるたくさんの人の夢を後押ししていずれ大輪の花を咲かせてほしい、
という願いを込めて計画に進んでいった。



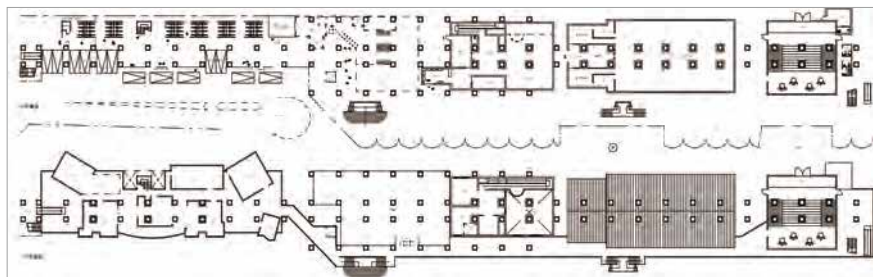
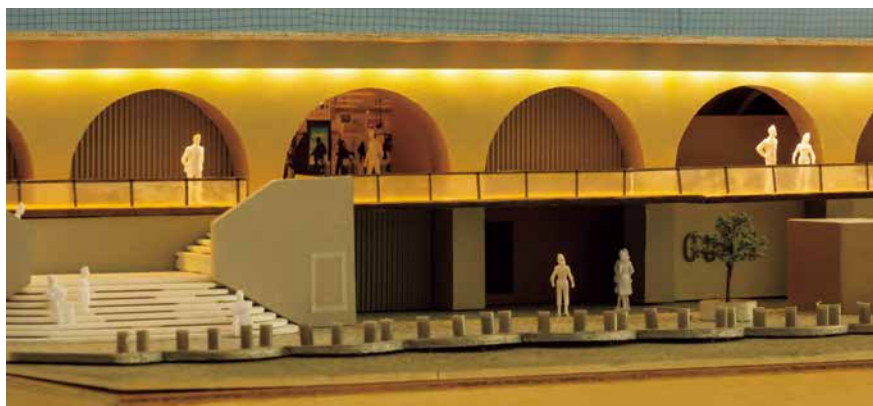
千五百秋 ～ちいほあき～

山口 瑞生

Mizuki Yamaguchi

前川ゼミ

近年量のある和室空間が減少していき、床座から椅子座への変化。
また、和室空間に西洋の家具が取り入れられていることから、
和室が持っている本来ある空間の良さが低減している。
そこで和室空間の良さを高めることができ、和室空間と海外の西洋家具との融合させた
新たな家具デザインを提案します。



tsutsui PLAZA

山田 茜
Akane Yamada

三井田ゼミ

奈良県で唯一の高架下にある駅、近鉄筒井駅
その特徴を全く利用することなく過ごされていることに疑問を抱き、
高架下の利活用について考えました。
通勤通学以外での利用目的を見出し、新しい駅前のあり方を提案



組み立て式の遊具 ～自分好みのデザインに～

武井 穂香
Honoka Takei

三井田ゼミ

組み立て・解体が可能な木製遊具

自分好みに着色や、デザインの変更ができる

子供たちが自分の手で完成したと思える、愛着が湧き長く遊べる遊具を提案

卒業論文



高齢者の生活実態からみた環境調整行動を促す介入 — 奈良県農村部を事例として —

笠島 拓真

Takumi Kasajima

米田 雄人

Yuto Komeda

東ゼミ

〈目的〉

日本は世界屈指の長寿国であるが、健康寿命の延伸が課題である。そのためには、回復可能であるフレイル(要支援状態)に適切な介入を行い、健康自立に回復させることが望まれる。そこで本研究では、高齢化の進む奈良県農村部を対象として、生活実態及び介入調査を実施する。

〈方法〉

奈良県農村部に住む高齢者25名(男性9名、女性16名、平均年齢77歳)と大学生20名(男性10名、女性10名)の合計45人を被験者とした。

・調査内容-

・温熱環境実測

居間(温湿度)、寝室(温湿度・照度・紫外線強度)を10分間隔で自動計測

・アンケート

基本チェックリスト、睡眠の質調査票、生活行動記録、介入ツール使用感アンケート

・介入概要

温度変化により色が変わるインクで印刷されたティッシュケースとボックスを配布し、一部の高齢者に対しては組み立て・設置方法の相談に対応した。

・調査期間

2022年7月～8月の約45日間

〈まとめ〉

今回の被験者の中で昨年度から継続している11名について、フレイル度の指標とした基本チェックリストの合計点を比較した結果を図1に示す。特にフレイル度が大幅に上昇した被験者4名(上昇群)、下降した被験者3名(下降群)に着目して分析した。

生活行動記録と室内温熱環境実測結果を群別にみると、フレイル度下降群は自発的に環境調節行動を行っていたが、上昇群ではそれは見受けられなかった。睡眠の質においても、フレイル度下降群の睡眠の質は良好であったが、上昇群は現状維持もしくは低下傾向にあった。温熱環境要因とフレイル度上昇に伴う心身状態の悪化が、睡眠の質の低下に影響した可能性がある。

熱中症予防に向けた環境調節行動を促す目的で、温熱環境を可視化するツールを居間・寝室に設置してもらった。その結果、温度計を見たり暑熱対策を行うきっかけとなっていた(図2)。また、高齢者はツールの色変化がなくても、それを確認することで安心感があるという回答が多く見られ、本介入が室内温熱環境に対する意識の変化に繋がっていた。

快適な室内環境を作ることは可能であるが、それに向けて自発的に行動することが最も重要ではないか。フレイルの進行を予防し健康寿命を延伸させるためには、『自発的行動』が不可欠と考える。

謝辞:

ご協力頂いた被験者の皆様に感謝いたします。



図1 基本チェックリスト合計点



図2 ツール使用と温度への意識



建築家岡田孝男の茶室研究における独自性

後宮 尽我
Jinga Atomiya

前川ゼミ

〈背景と目的〉

日本には、多くの数寄屋茶室があり、小空間の技術や歴史に対する多くの研究が行われてきた。その研究は歴史家だけでなくつくり手である建築家も多く行っていた。堀口捨己や吉田五十八が茶室研究では有名で、関西では三越住宅建築部に所属していた岡田孝男が研究していた。その後、堀口捨己と茶室の関係についての研究は多くされているが、岡田孝男がどのような視点で茶室を捉え、研究していたかについては研究されていない。

本研究では、岡田孝男の茶室研究における独自性を明らかにすることが目的である。歴史研究者ではない建築家というつくり手が、どのような視点で茶室を捉えていたかを考察することは、茶室が本来持つ建築的価値が明らかにすることができ、これからのデザインのヒントになるということがこの研究の価値だと考える。

〈方法〉

岡田の茶室研究の独自性を明らかにするために、戦中戦後、同時代に活躍した茶室研究科の堀口捨己と中村昌生の二者の視点と比較する。分析方法は以下である。

- ①岡田のみ選択の茶室をピックアップし、ここから岡田の要約した文章、写真から独自の視点を抽出する。
- ②その工程で得た、岡田の独自性を他の二者が選んだ茶室において、それぞれの説明文や写真などを用いて比較し、相互関係とさらなる独自性を抽出する。

〈分析対象〉

『近畿茶室行脚』岡田孝男著書、昭和18年、晃文社。

『日本の美術No.83』堀口捨己著書、昭和48

年、至文堂。

『茶室研究』堀口捨己著書、平成2年、鹿島出版会。

『茶室100選』中村昌生著書、昭和58年、淡交社。

〈結論〉

本研究により、岡田孝男の茶室研究における独自性の一端が明らかになった。

岡田は、同時代に活動した堀口捨己や中村昌生と比較し、歴史的な視点・考察より内部意匠や構成・動線に着目し、茶室を研究していることが分かった。すなわち岡田は、茶室を単なる歴史的建造物として見ていたのではなく、利用していた人々を考えながら住宅を評価するように見ていると言える。

実作の中ではこうした研究の眼差しが関係していることも推測された。茶室の改修の実作では貴人口、踊り口の改修を行っていることからそのことが窺えた。

また、茶室研究でみられた内部意匠へのこだわりは、装飾の役割を否定せず、装飾を保持した意匠を手掛けた実作からも確認できた。

岡田は、最新のデザインに関する知識を発揮して個性的な仕事を行う建築家として能力が評価されたのではなく、そういったものを取り入れつつ、やや保守的な和風住宅や様式を基に彼の意匠性、装飾の観点から提供することの出来るつくり手であった。過去にある使われたアイデアを捨てるのではなく新しい時代に適合し、モダニズムとは違ったデザイン手法を実践していることが分かった。過去のアイデアへの尊重は、茶室研究の影響が大きくあると考える。



夏季における室温と好まれる気流

袴 開斗
Kaito Inori

東ゼミ

〈目的〉

今年度は大規模な節電要請が行われ、電気料金の高騰も社会問題となっている。夏にエアコンの消費エネルギーを抑えつつ快適感を得る一般的な方法として、扇風機の併用が挙げられる。そこで本研究では、大学生を対象として温度条件の異なる環境下で好みの気流を自由に設定してもらい、その時の生理心理反応を計測し、快適感の得られる範囲を調査することを目的に実験を行った。

〈方法〉

- ・被験者：男子大学生8名
- ・実験室：本学教室(R211)
- ・実験期間：2022年8月24日～9月2日
- ・測定項目：環境温度、放射温度、相対湿度、風速、PMV、皮膚温、主観申告、体質等に関するアンケート

実験のタイムスケジュールを表1に示す。被験者の着衣量は0.4cloとした。実験前に前室で20分待機し、皮膚温センサーの装着、体質の個人差に関する質問票に回答してもらった。その後、室温30℃に設定した実験室に移動し、40分間椅座安静の状態を維持した。扇風機は被験者の正面に設置し、最初の10分間は扇風機を停止、その後30分間は気流の強さをリモコンで自由に調整してもらった。温冷感、快適感、発汗度等の主観申告は10分間隔で回答してもらい、同様に27.5℃条件、25℃条件の順で実施した。

表1 実験のタイムスケジュール

時間(分)	-20	0	10	40
設定温度	前室25℃	順応時間	条件A(30℃) 条件B(27.5℃) 条件C(25℃)	
皮膚温(Hardy&DuBois7点+背中)				
環境温度(10,60,110,160cm)				
風速(60cm)				
湿度(60cm)				
放射温度(60cm)				
質問票	●			
申告		●	●	●
扇風機		OFF	ON	ON

〈まとめ〉

実験室のエアコンによる温度調整は、30℃条件は安定、その他の条件では若干変動したものの、相対湿度50～60%の範囲で調整できた。

30℃条件では多くの被験者が、扇風機を使用し、27.5℃条件では30℃条件と同じ強さのままの被験者と、途中で停止する被験者に分かれた。冷え性は男性より女性に多いことが知られているが、今回の男性被験者のうち5名が冷え性と申告しており、体質による違いと考えられた。25℃条件ではすべての被験者が途中で扇風機を停止するか、最初から使用しなかった。体質による好まれる気流の差は温度が低くなるほど大きくなる傾向が確認された。

生理反応として皮膚温をみると、平均皮膚温が約33℃の時に、PMVが0となった。変動をみると、30℃条件では部位別皮膚温の差が小さいが、環境温度の低下に伴いその差は大きくなり、特に冷え性者にその傾向が顕著に現れていた。

最も高温条件である30℃においても、1.5m/s以上の気流を設定するケースはわずかであった。この時、PMVは快適範囲である±0.5には至らず、暑くて不快な領域であったことから、室温30℃では気流を併用しても快適性を得ることは困難と考えられた。今回の実験データを総合的に分析した結果、空調の温度を下げすぎず、気流を併用して快適性が得られる室温の目安として28℃を提案したい。このときの好まれる気流は冷え症者で約0.6m/s、非冷え症者で約0.9m/sであった。また、冷え症者は、下半身の皮膚温変化に敏感であったため、気流を下半身に直接当たらないようにする、着衣量を調整するなどの工夫を行うと気流による不快感が軽減すると考えられた。

謝辞：

実験にご協力頂いた被験者の皆様に感謝いたします。



近くて遠い隣まちから、ちょっと知っている隣まちへ
～竹馬★クイズラリーを事例として～

植山 真智
Machi Ueyama

松村 理菜
Rina Matsumura

清水ゼミ

〈活動の背景と目的〉

自分のまちについて学ぶことはさることながら、隣まちについて学び、お互いのまちに興味を持つことは、高意義なまちづくりの観点からも重要である。しかし、学校教育において自分のまちについて学ぶ機会はあるとしても、隣まちのことを学ぶ機会は多くはない。そこで、より多くの方に隣まちを身近に感じてもらいたいとの思いから、この活動を始めた。

本活動はイベントを通じて、参加者、運営者の意識変容を促し、「近くて遠い隣まちから、ちょっと知っている隣まち」にすることを目的とする。

〈方法〉

河合町と広陵町の小学生を対象に、約2年間にわたって、両町のクイズを出題する竹馬★クイズラリーを実施した。我々が中心となって地域住民を交えた運営組織をつくり、企画から運営までを行なった。運営者側には①共同作業を通じて、両町の地域住民の交流を促す②互いの地域の魅力の再発見を目指すの2点、イベント参加者側には、クイズラリーを通じて知らず知らずのうちに自分のまちや隣まちについて知ってもらうことを目標とした。イベント終了後には、参加者・運営者に対してアンケート調査を実施し、それぞれに掲げていた活動目標が達成できていたかを明らかにした。

〈まとめ〉

●イベント参加者(小学生)

自分のまちに興味を持ったと回答した人が約7割、隣のまちに興味を持ったと回答した人が約6割であった。(図1)この結果から、イベントを通じて参加者への目標は達成できたと考えられる。

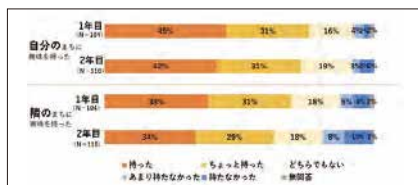


図1 自分のまち・隣まちに興味を持ったか

●運営者

約7割のメンバーが新しい発見があったと回答した。詳細を分析すると、また、準備段階から運営に参加していたメンバーの方が、新しい発見をしやすい傾向にあった。(図2) また、イベントで知り合ったメンバーとイベント後も関わりを持っているメンバーが数多くいた。(図3) 運営者の活動参加率・班内で協力作業が必要な度合いが高い程、知り合った運営メンバーと、イベント後の関わりを持ちやすい傾向にあった。

●参加者・運営者

竹馬★クイズラリーを通じて、参加者、運営者への目標を達成することができた。今後の運営では、より多くの方に運営に深く関わってもらうことが有効であると考えられる。



図2 イベントを通して地域の新しい発見があったか



図3 メンバーとイベント後に関わりを持ったか

謝辞:

本活動にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。



睡眠アプリと睡眠計測器の特徴に関する一考察

大本 棕星
Ryosei Oomoto

辻 大輝
Daiki Tsuji

東ゼミ

〈目的〉

スマートフォンが普及するなか、良質な睡眠に対する意識の高まりにより、近年では無料の睡眠計測器アプリが多数開発され、誰もが手軽に自分の睡眠をモニタリングできるようになった。また、様々な種類の高機能睡眠計測器も販売されている。そこで本研究では、これらの睡眠判定結果を相互比較し、特徴を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

- ・被験者：大学生10名(男性)
- ・測定項目
 - 日中活動量：多機能万歩計
 - 寝室環境：温度・相対湿度・照度・紫外線強度(10分間隔自動計測)
 - 生活行動記録(就寝前)
 - 主観的睡眠評価(起床後)
 - 睡眠計測アプリ：無料2種類(A・B)
 - 睡眠計測機器：腕時計型・指輪型

被験者は普段通りの生活を3日間継続し、多機能万歩計(3次元加速度センサー)は入浴時以外装着した。就寝前に生活行動記録に一日の行動を簡単に記録し、就寝時に腕時計型計測器、指輪型計測器を装着し、睡眠アプリ2種を起動した。起床後は、すぐに主観的睡眠調査票に記入した。

測定期間：2022年9月～10月

〈まとめ〉

日中の活動量が推奨レベルを満たした被験者は2名で、全体的に活動量は少ない傾向にあった。寝室の温熱環境は概ね良好で、エアコン等で適切に環境調節がなされていた。就寝時にはカーテン等を閉めて消灯しており、照明や日照の影響はほとんどなかった。

各アプリ・計測機器とも、総合的な睡眠の質としてスコアや得点で表示され、これらは主観的睡眠評価の結果と概ね関連がみられた。欠測の少なかった被験者のデータをもとに、相互比較して評価した結果を表1に示す。アプリAは睡眠時間が長い場合に得点が高くなる傾向があり、中途覚醒に対する感度は低かった。アプリBは、計測時に適切な感度を設定する必要があり、睡眠深度とリズムが得点と関連していた。指輪型計測器は指のサイズと合わないためデータが欠測する事例があったが、計測項目が最多で総合的に得点に反映されるため、詳細に確認できる利点があった。腕時計型計測器は中途覚醒時間が短く、睡眠深度とリズムが得点に影響した。装着に負担感があるが、日中の活動量を測定することもできる。

それぞれのアプリや計測機器の特徴を理解して総合得点を解釈し、睡眠の質向上に活用することが望まれる。

謝辞：

実験にご協力頂いた被験者の皆様に感謝いたします。

表1 アプリ・計測機器の測定項目と特徴

項目	無料アプリ		計測機器	
	A	B	指輪型	腕時計型
総合得点	◎	◎	◎	◎
睡眠時間	◎	○	○	◎
入眠時刻	○	○	○	×
中途覚醒	△	○	○	○
起床時間	◎	◎	○	○
入眠時刻	○	○	○	○
いびき	○	×	×	×
スヌーズ	○	○	×	×
深い睡眠の割合	×	×	○	○
睡眠呼吸指数(乱れ)	×	×	○	×
呼吸減少回数	×	×	○	×
平均心拍数	×	×	○	×
血中酸素レベル	×	×	○	×
寝返り平均	×	×	○	×
就床時間	○	○	×	×

◎：信頼性高 ○：概ね信頼可 △：信頼性低 ×：計測不可



中小企業振興基本条例に基づく取り組みの系譜 ～広陵町を事例として～

奥野 皓晴
Kosei Okuno

清水ゼミ

〈目的〉

地域社会の経済・生活基盤・地域課題解決の役割を担う中小企業の振興は喫緊の課題である。そのため、各地で「中小企業振興基本条例」を制定する動きが見られる。広陵町では、2018年に「広陵町中小企業・小規模企業振興基本条例」が制定され、コロナ禍で産学官連携の臨機応変な対応の実現を後押しした。

本研究では、制定以前に誰がどのような経緯を経て制定に至り、制定後は如何に未曾有の事態であっても、臨機応変な対応を可能としたのかを明らかにする。

〈方法〉

条例制定に向けて取り組んだ、広陵町地域振興部・広陵町商工会・奈良県中小企業家同友会・計8名の方に対し、対面でのヒアリング調査を実施した。

加えて、提供していただいた資料を元に年表形式でまとめ分析を行った。

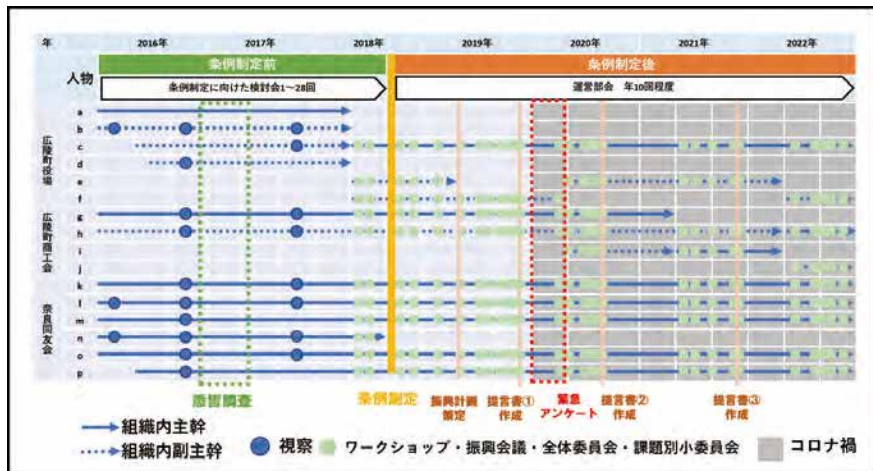
〈まとめ〉

本条例は「広陵町」「広陵町商工会」「大学」「奈良同友会」の四団体にて始まり、全28回の検討会や視察、学習会、悉皆調査を経て制定に結びついた。

役場、商工会などでは、担当者が異動や定年退職等で唐突に変わることが往々にして起こり得るが、今回の調査からは、各組織内の本条例に関わる主幹が次の主幹に変わる際に、数年以上副主幹として関わってきた者と変わっていることなどから、引き継ぎがうまくいっているのではないかと推測される。条例制定後は、さらにワークショップや振興会議などといった行政と地域事業者が共に話し合う場が格段に増えていった。

このように、組織内で複数人で取り組み、条例制定後も活発に行政と地域事業者が議論できる場を設けたことが、コロナ禍という前代未聞の状況下でもその場の状況に合わせた活動の実現に至ったのではないかと考えられる。

表1 条例の軌跡と主な担当者の変遷





昭和戦前期における国風照明器具の形成過程に関する研究

金子 颯汰
Sota Kaneko

前川ゼミ

〈目的〉

昭和戦前期までの近代和風建築で使われている照明器具に見られる特徴や共通点を見つけることで、西洋の近代的な建築の考え方や技術を日本が受容し、国風照明器具が作られていく過程を明らかにする。

〈意義〉

現存している近代和風建築を保存・修復する際、建物内観・外観や家具と同等の視点を照明器具においても得ることができる。これにより、今までのように照明器具が保存の対象とならない状況や、安易に照明器具が変えられるような状況が無くなり、建物、家具、照明器具、全体の調和が取れた空間を残していくことができるのではないかと考えられる。

〈方法〉

昭和初期、当時の照明器具製造業最大手の企業であり、国風化照明器具を多く製造していた株式会社佐々木商會が出版したカタログ『電燈照明器具』を分析対象にする。その中でも一般的に流通していたであろう既製品に絞っていく。さらにその既製品918個から完全な西洋型を除いた290個の国風照明器具を分類対象とし、この290個を独自に分類、分析していく。

〈結論〉

本研究により、昭和戦前期の照明器具に見られる特徴や共通点が明らかになり、西洋の近代的な建築の考え方や技術を日本が受容し、国風照明器具が作られていく過程の一端が解明された。

本研究で分析の対象とした一般流通品の照明器具では、使用されている国風化手法

の中では形状を変化させず国風化が図れる「文様」が多く採用されていた。

また「文様」以外では「架木」「房」「竹細工」「竹細工風」が次いで多く採用されていた。これらの手法は大きく形状を変化させずに国風化することが可能である。このように国風化の特徴としては、あくまで元々の西洋の照明器具をあまり変化させることなくそこに国風的な要素をプラスするというデザインスタンスであった。一方で純国風の照明器具に対しては、そもそもそうした細かな国風化手法はあまり使用されていないことも分かった。

つまり西洋の近代的な建築の考え方や技術を日本が受容し、国風照明器具が作られていく過程は、西洋の照明器具の形状を尊重しながら、形状を変化させることなく国風化要素を付け加えるというものである。その結果、西洋の近代的な建築の考え方や技術に対応しながらも、照明器具に日本独自の国風要素を残すことに成功したと言えよう。

最後に『電燈照明器具』の照明器具を「燈火器具年表」の明治以降に追記という形でまとめたものが表1である。原案としてこの表を作成したが特注品なども分析することでさらに改良していけると考えられる。

表1 明治以降の「燈火器具年表」

『日本古燈器大観と燈火器具年表作成の試み』に掲載されている「燈火器具年表」の明治以降に追記



多世代交流拠点の持続可能な運営に関する活動報告 ー3年目のきらきら☆ステーションを事例としてー

川上 伊純
Izumi Kawakami

清水ゼミ

〈目的〉

地域活動への参加は、世代によって目的が異なると言われている。

大和高田市では、住民主体で多世代交流拠点「きらきら☆ステーション」を運営している。3年目を迎え、運営者の不足などの課題がある。本活動では、現在、継続的に運営に関わっているメンバー（以下：メンバー）の活動動機と継続理由を明らかにすることで、今後のきらステ運営の継続的な人材の確保の示唆を得る。

〈方法〉

実際に運営に関わりながら、運営者確保のための工夫を行った。(表1)さらに、メンバーにヒアリング調査を実施した。

〈まとめ〉

参加動機について、「自己成長と技術習得・発揮」に関する内容は、60歳未満のメンバーで多く挙げられた。「利他心」については、60歳未満の動機として挙げられなかった。一方、60歳以上のメンバーは6名のうち4名が

「利他心」に関する内容を動機として挙げた。継続理由については、活動に参加する中で「家族(子供)に様々な経験をしてほしい」などと60歳未満のメンバーでも「利他心」に関する内容を挙げるメンバーが現れた。また10名のうち4名が参加動機として挙げた「人間関係の広がり」に関する内容は、7名が活動の継続理由として挙げた。この項目については、「違う年代の人と関わる機会になる」と、年齢に関わらず、多くのメンバーが自分と違う年代の人と関わることに前向きな意見を持ち、活動を通して、様々な年代の人と関わるにより、世代を超えた関わりにやりがいを感じるようになったと考えられる。



写真1 現地運営の様子

表1 年間スケジュール

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
オンライン会議	第2・第4土曜日						第4土曜日				
オンライン交流会	●●●●									(列面)	●
現地運営	毎週木曜日 10:30~12:00/12:30~14:00										
ヒアリング調査	ヒアリング調査実施										
	ヒアリング調査の分析とまとめ										

表2 活動参加の動機

	20代			30代			40代			60代			70代		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J					
自己成長と技術習得・発揮	2	2		1					1				1		
理念の実現				1					1		2	1			
利他心									1	1	1	1			
人間関係の広がり									1			3			
テーマや対象への共感				1	1	1							1		

表3 活動を継続する理由

	20代			30代			40代			60代			70代		
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J					
自己成長と技術習得・発揮	1			1					1		2	1			
理念の実現				1					1						
利他心			1	1		1	1	1	1						
人間関係の広がり	1	1		1		1	3	1	1						
他							1						1		



今井町及び大和八木駅周辺における 景観色彩に関する研究 ―自動販売機を中心として―

久米 亜衣子

Aiko Kume

三浦 百々香

Momoka Miura

李ゼミ

〈研究目的〉

現在、各地域には屋外広告物の色彩規制が定められている。とりわけ、橿原市の景観条例や色彩ガイドラインでは、その基準が曖昧である。また、屋外広告物と同様に宣伝効果のある自動販売機に対しても明確な色彩基準が定められていない。本研究では自動販売機及び屋外広告物に注目し、歴史的景観に配慮した色彩を提案することを目的とし、橿原市を代表する歴史的街並みの今井町と、今井町へアクセスの便が良いとされる大和八木駅周辺に適した景観色彩の検討を行った。

〈方法〉

スマートフォンで撮影した今井町の画像試料(K1～K4)に対し、Adobe photoshop v22.5.1を用いて、自動販売機及び屋外広告物の色相、明度、彩度の段階的な変更を行った。色相は、赤色、黄色、緑色、青色の有彩色4色と白色を選出し、明度、彩度においても視覚的に均等な差が見られるように段階的な調整を行った。これら計267枚の画像試料を用いて被験者実験を行った。被験者はA軍(今井町在住の24～84歳、男女33人)B軍(大学生18～26歳、男女48人)を対象に、ノートPC画面に6枚ずつ画像試料をランダムに提示し「自動販売機及び屋外広告物から今井町らしい色彩」を選んでもらった(複数回答可、無回答可)。

〈まとめ〉

今井町に適した色彩として低明度低彩度の色彩が好まれる傾向が見られた。色相では、赤色に加工した画像試料は他の色相と比べて、今井町に適しているという回答が多かった。しかしK4は緑色の評価が低く、その原因として緑色は赤色の補色であることと、自動販売機の周辺に看板と置物があり、雑然とした印象が与えられ、他の画像試料よりも評価が低かったことが考えられる。全体的に明度と彩度が極めて低いものが好まれるが、画像試料において自動販売機の面積比が小さい場合は、明度と彩度を少し低くしたものも許容される傾向が見られた。また、自動販売機の面積に関わらず、緑色と青色では低明度低彩度が多く選ばれたことから、明度と彩度に関わらず、色相から今井町に相応しくないと評価されていることが推測される。南都銀行の看板では、赤色に対する評価にばらつきが見られたことから企業のCIカラーが影響していることと、看板の面積が小さいことが影響されたことと考えられる。

被験者の50%以上が今井町らしいと回答した画像試料を選定した結果により、該当する値は5R1.0/1.0から5R 4.0/6.0、5Y 1.0/1.0から5Y 4.0/4.0、5G1.0/1.0から5G 4.0/6.0、B1.0/1.0からB4.0/4.0の範囲となった。橿原市が掲げている色彩ガイドラインのマンセル表色系にその範囲を図2に示す。



図1 今井町の画像試料(K1～K4)

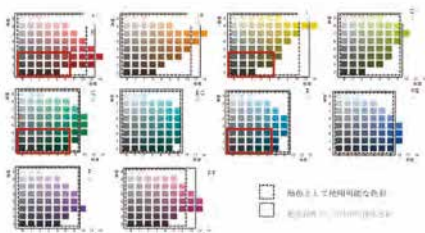


図2 今井町の景観色彩の提案



橿原市今井町における共同制作縁台の使用状況 および着座行動の実験に関する研究

小谷 芽未
Megumi Kotani

陳ゼミ

〈目的〉

縁台として庶民に一般化されたのは江戸時代で、当時は玄関に出し夕涼みや休憩はもちろん、コミュニケーションの場としても使われていた。かつての橿原市今井町の道路空間でも、人々が自宅の軒下に縁台を出して、コミュニティの場としても利用してきた。しかし、現代では、和風住宅や縁側の減少とともに縁台も徐々に姿を消しており、縁台に腰を掛ける人々の姿も少なくなった。そこで、近所の方の新たな居場所にしたいという思いから、今井町の住宅や店の軒下や玄関先に、2018年10月から今井町自治会と畿央大学が共同制作縁台を設置した(図1)。



図1 今井町における共同制作縁台

本研究では、共同制作縁台について①縁台の利用状況を把握すること、②今井町内の方は縁台を利用しているのか、③設置方法と着座行動の誘発関係を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

縁台の利用状況を把握するために、共同制作縁台の利用者、今井町の住民を対象としてアンケート調査を実施した。行動観察調査と聞き取り調査も行った。また、「ご自由にお座りください」の看板の効果の実験と、縁台と入り口の距離における着座行動に関する実験を実施した。

〈まとめ〉

共同制作縁台の利用者のアンケートは56部であった(図2)。座った目的では、半数以上

の43人が休憩と回答した。夕涼みは6人、会話は8人、まちの様子を見るは11人、荷物置きは3人、遊びは1人、飲食は3人、その他は3人がいた。利用頻度では、週2～3回程度の人と週1回程度の方は3人、月1回程度の方は15人、ほぼ毎日の方は1人という結果だった。約49%の人が定期的に利用していると回答した。座ったときの感覚は、80%の人が気軽に座れたと回答した。

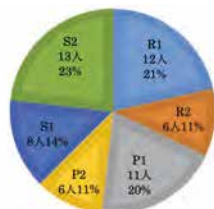


図2 縁台別のアンケート数(N=56)

今井町の住民のアンケート(158部)について、共同制作縁台を座ったことがある人は41人約26%、座ったことがない人は116人約74%となった(未回答1人)。座ったことがない理由について、「縁台に座る理由がない」と回答した人が92人おり、一番多かった。座ったことがある41人の中に定期的に利用している人が半分以上ということがわかった。

着座行動の誘発について、「ご自由にお座りください」の看板の設置実験から、看板の設置によって、シールが張られた枚数が増えた。看板の設置はより気軽に座れて、効果的であった。

以上結果から、共同制作縁台は多くの住民にとって現段階では必要ではないことがわかった。一方、「鳥の音、町の音で癒されるから」と縁台を居場所とし、利用している人もいた。また、「ご自由にお座りください」の表示は着座行動の誘発に関係していることが明らかになった。少人数でも日頃から利用して、日常の一部に関われていることがこの共同制作縁台の存在の意味であると考えられる。

謝辞:

ご協力頂いた、住民の皆様へ厚く感謝申し上げます。



一戸建て住宅におけるインナーバルコニーの設置実態と類型に関する研究

近藤 雄哉

Yuya Kondo

陳ゼミ

〈目的〉

住宅における半屋外空間とは、屋外と屋内を緩やかにつなぐ中間的な領域のことで、人々の生活を豊かにするものである。しかし近年、冷暖房を中心とした生活、土地価格の上昇などから半屋外空間の縁側が造られることはほぼなくなってしまった。一方、住宅の「インナーバルコニー」と呼ばれる半屋外空間は造られて、流行しつつある。本研究では日本の既存一戸建て住宅におけるインナーバルコニーを調査対象として、外壁の数や囲い方によって類型化し、平面形状と大きさ、空間の用途と深く関係する隣接空間を調査し、インナーバルコニー設置の実態を把握することを目的とする。

〈方法〉

インナーバルコニーは曖昧に定義されているが、本研究におけるインナーバルコニーは4つの条件を定義する(図1)。

- ①屋根が付いており、外気が入れる2階以上の半屋外空間。
- ②建物の内側に入り込むような空間で、屋内空間の上に設置されていること。
- ③室内空間を外に切り出したという観点から、室内感を感じるに当たって外壁2面や3面に囲まれている空間。
- ④室内空間の延長として豊かな生活場面が行われるように、奥行は1.8m以上。

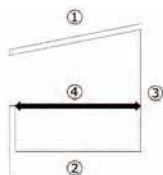


図1 インナーバルコニーの断面イメージと外観事例

調査対象について、ウェブサイトSUUMO注1)にて、全数が13,829戸の既存の注文住宅(一戸建て住宅)の中から、キーワード検

索の項目である「インナーバルコニーがある家」と「図面有り」に該当する816戸(5.9%)を調査対象とする。そこから写真と図面を見て定義に沿ったインナーバルコニーのある一戸建て住宅を抽出し調べる。そして収集したデータを分類し、項目別の比較、考察を行う。

〈まとめ〉

調査結果について、インナーバルコニーのある一戸建て住宅は全部で254事例があり、8つの類型分類ができた(表1)。

表1 インナーバルコニーの平面イメージと類型(N=254)

外壁2面 開放2面	2A:96事例 37.8%	2B:10事例 3.9%	2C:25事例 9.8%	2D:3事例 1.2%	134事例
外壁3面 開放1面	3A:46事例 18.1%	3B:65事例 25.6%	3C:3事例 1.2%	3D:6事例 2.4%	120事例

まず、各類型の数は2A>3B>3A>2C>2B>3D>2D=3Cの順となった。類型2Aが96事例と最も多く、全数の3分の1以上(37.8%)を占め、類型3B(25.6%)が2番目、3A(18.1%)が3番目に多いという結果となった。一方、外壁2面型と外壁3面型の合計の差は14事例であり、大きな差がなかった。

次に、平面形状の結果について、最も多い形状は1.8m×2.7mのb形状である。そして形状の平均値は2.14m×3.31mの7.08㎡であった。

最後に、インナーバルコニーに直接出入りできる隣接空間について、1つの出入りできる隣接空間が180事例、2つが70事例、3つが4例という結果になった。隣接空間の種類は7種類が確認され、数の多さは廊下>部屋>寝室>居間>洗面脱衣室>書斎>収納の順となった。

注1) <http://suumo.jp> (閲覧日: 2022年12月)



若年者における香りやにおいに対する個人差

後藤 文太
Bunta Goto

志村 明則
Akinori Shimura

東ゼミ

〈目的〉

元々は悪臭をマスキングする目的で使われた香り付き製品は、その種類や用途が多様化し、様々な場面で使用されるようになり、近年では香害という新たな問題が顕在化している。これには香りやにおいに対する感じ方の違いが影響していると考えられる。そこで本研究では、若年者を対象としたアンケートと嗅覚検査により香りやにおいに対する意識や感覚の個人差について考察する。

〈方法〉

1) 意識調査

Google Formsを用いて以下の内容に関するアンケートを実施した。

主な調査内容

- ・自分や他人の香りやにおいへの意識
- ・香水・柔軟剤の使用目的や体調の変化
- ・「香害」の認知度 等

2) 嗅覚検査

嗅いでもらうにおいとして、においスティック(第一薬品産業株式会社)の12種(墨汁、材木、香水、メントール、みかん、カレー、ガス、バラ、ヒノキ、靴下、練乳、ニンニク)と無臭を提示し、臭気強度(6段階)、快不快度(9段階)、容認性(2段階)、においの同定について回答してもらった。

【被験者】

大学生 男性10名、女性15名、
喫煙者(全て男性3名)の計28名

【調査時期】

2022年9月～11月

〈まとめ〉

意識調査は10-20代の男女計190人より回答を得た。におい環境の嗜好性に関しては、消臭されたにおいのない環境、香りを付加した環境、特段何もせず生活臭が普通に感じられる環境に回答が同程度ずつ分散する結果となった。この傾向に性差はみられなかった。においや香りに対する敏感さについては、女性の方が男性よりやや敏感という回答割合が多いが、男女ともに7割以上が自分や他人のにおいや香りを気にしていた。普段、香水などの香り付けをしている人も全体の約7割を占め、その理由として、エチケットやモチベーションなどが挙げられた。一方で、香り付き製品で具合が悪くなった経験のある人は約2割存在し、その原因としては、香水・柔軟剤・香り付き合成洗剤等が挙げられた。しかし、香害については男女共に半数の人が知らないという回答しており、その認知度は低かった(図1)。

嗅覚検査では、においの評価は提示したにおいの種類により異なるが、総じて、においの強さの結果よりも、快不快度の結果において差が大きくなる傾向があった。特にその傾向が顕著であったのが香水のにおいで、アンケートにより体調不良の原因として最も多く挙げられたこととの関連がうかがえた(図2)。また、いわゆる悪臭である、ガスや靴下のにおいの評価においては、喫煙者のにおいの強さの評価がやや弱く、不快度をやや弱く評価する傾向がみられた。日常生活においては、このような香りやにおいに対する感じ方の個人差を理解して香り付き製品を使用することが望まれる。

謝辞：

実験にご協力いただいた被験者の皆様に感謝いたします。

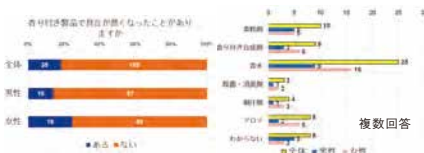


図1 香り付き製品による体調不良の経験とその原因

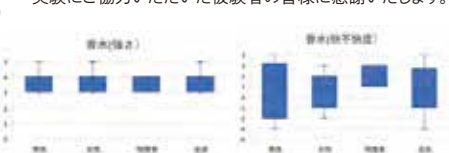


図2 香水の強さ・快不快度評価



生活行為の違いによる好ましい照明環境の照度と色温度

佐々木 柊真

Toma Sasaki

東ゼミ

〈目的〉

光源の色温度により好ましい照度の範囲は異なることが知られている。LED照明の普及により、リモコンで簡単に調光・調色が可能となったが、実際にその機能は活用されているだろうか。そこで本研究では、大学生の照明の調節行動の実態を明らかにするとともに、個室における生活行為の違いによる好まれる照度と色温度の範囲について季節差を含めて検討する。

〈方法〉

・アンケート調査

本学学生を対象として、Google Formsを使用し、自室の照明環境、照明器具の調光・調色機能の有無とその使用状況等を回答してもらった。

・被験者実験

大学生10名を被験者とし、個室を想定した実験ブース内で設定した生活行為2種4条件（学習：視作業・PCタイピング、休息：何もしない・スマホ）ごとに、照度・色温度をリモコンで調節してもらった。作業終了後には印象評価も行った（図1）。ブース天井には、照度0-1400lx、色温度2,600-6000Kの範囲で調節可能なLED電球を被験者の視界に入らないよう調節して設置し、昼光は遮蔽した。壁面は白系の壁クロスとした。

・調査時期

2022年8月～12月

構成（説明）	各条件設定	作業	アンケート記入	計測	電量（消費）	計測
5分	1~2分	5分	2分	1分	1~2分	1分
照明したブースに入室	条件に満たした好ましい照度・色温度に各自設定	4条件	50秒によるアンケート記入	1項目に設定した電量を変更したいのであれば変更		

図1 実験のタイムスケジュール

〈まとめ〉

アンケートの結果、自室において高照度、中～高色温度の照明環境で生活している人が多かった。照明器具に調光機能が約6割、調色機能は約4割があると回答したが、約半数はそれらの機能を使用していなかった。

実験において被験者が選択した照度と色温度の範囲は概ねクルーゾフの快適範囲内に分布したが、一部、低色温度高照度の快適範囲外の領域が選択されたのは、実験時に使用した光源が当時と異なるためと考えられた。生活行為別にみると、学習時には照度・色温度を高く、休息時には照度・色温度を低くする傾向があった。

季節差については、学習時に選択する色温度の分布範囲が夏季に広く、冬季にやや狭くなる傾向があったが、休息時にはそのような傾向はなく、総じて季節差よりも生活行為や作業内容による違いが大きかった。例えば、休息時に何もしない場合には2,500～3,300Kを選択する群と4,000～5,500Kを選択する群に分かれ、嗜好性に差がみられたが、スマホ使用時には選択された色温度は3,500～4,500Kに集中した。

照明の調光・調色機能の活用率は低いのが現状であるが、生活行為に合わせて有効に活用することは快適性や作業性の向上につながると考えられた。

謝辞：

実験にご協力頂いた被験者の皆様に感謝致します。

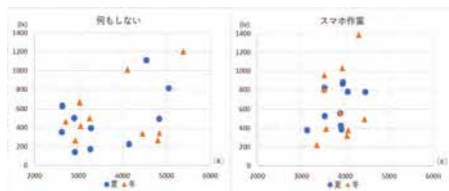


図2 休憩時に選択された照度・色温度（作業内容別）



新型コロナウイルス感染症の自治会活動への影響

中島 由圭莉

Yukari Nakajima

清水ゼミ

〈目的〉

近年、人口減少による地域コミュニティの衰退で共助機能の低下により、地域の防災力の低下、町中での孤立化などの問題が浮上している。更に新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）の拡大により、地域活動が制限され、従来の問題が加速している。また、数年間活動を中止したことにより未経験の対応をせざるを得ないという新たな課題も発生している。本研究では、各地域の自治会活動においてコロナ前に活動されていたものが、令和2年度、3年度、4年度のコロナ禍でどのように変容したのか傾向を調査し、住宅地区分（i 旧村 ii 新興住宅 iii 混在住宅）や自治会活動の種類（i 地域行事 ii 祭祀儀礼 iii 社会福祉活動 iv 防災防火）ごとに分析し、今後の自治会活動の在り方の示唆を得る。

〈方法〉

広陵町の自治会の現状を明らかにするために、文献調査を実施した。

その後、下記の通り、広陵町の全区長及び自治会長を対象に聞き取り調査を行った。

調査対象	広陵町の全区長・自治会長
調査方法	聞き取り調査
調査対象者数	37名／41名 （有効回答率 90%）
実施予定時期	2022年10月～2023年2月
質問項目	【属性】自治会名 加入件数 加入率 小学校区 住宅地 【活動の詳細】活動名称／実施内容／活動目的／実施地域／活動費用／実施時間帯／活動頻度 【運営】参加対象者／参加人数／主体的に運営に携わっていた人の属性、人数／運営の手伝いに携わっていた人の属性、人数／準備期間／関連団体 【実施状況】2020年～2022年または今後の活動実施状況、その理由

〈まとめ〉

● 住宅地区別の自治会加入率

旧村と混在住宅では、おおむね90%以上の加入率を示しており、低い地区でも84%を下回らなかった。一方で、新興住宅地では、100%の地域もある一方で、低い地区では60%ほどとなっており、全体的に低い傾向が見られた。

● 住宅地区別の活動内容

旧村や混合住宅は、新興住宅地に比べると自治会活動の数が圧倒的に多く、特に祭祀儀礼が活動の大半を占める一方で、地域活動については、さほど見られなかった。新興住宅地は、全体的に自治会活動は少なく、活動内容の多くは、地域行事が大半を占めていた

● 活動種別のコロナ禍での活動状況

旧村や混在住宅の祭祀儀礼は、コロナ禍でも実施、もしくは制限して実施される傾向が見られた。新興住宅地の祭祀儀礼はほとんどが中止となっていた。さらに、新興住宅地の自治会活動の多くを占めた地域行事は、コロナ禍で中止された地域が多く見られた。一方で、R3年度以降の防災・防火活動は住宅地区分によらず実施されていることが明らかとなった。

● 今後の自治会活動について

今後の活動について、取りやめる活動があると回答した自治会の割合は、新興住宅地の方がわずかに多いことが明らかとなった。活動の種類で分析すると、社会福祉活動について取りやめる地域は見られなかったが、その他の活動については5%前後でやめるとの回答が見られた。

謝辞：広陵町内の区長自治会長の皆様には貴重なお時間を頂戴し、調査にご協力いただきましたことを深く感謝申し上げます。



非営利活動における後継者確保への挑戦 —広陵町健康農業を事例として—

中村 理紗
Risa Nakamura

西尾 幸記
Saki Nishio

清水ゼミ

〈目的〉

近年、非営利団体が増えているが、「人材の継続的な確保が難しい」という問題を抱えている団体が多い。

本活動は農業分野の非営利団体における広報活動の在り方について実証的に検討していくことを目的とし、広陵町で活動している「健康農業」を対象とし挑戦した。

〈方法〉

健康農業では昨年まではチラシ等の広報活動を行ってきたが、これまで新たな人材の確保に苦慮していた。

これを踏まえて広報方法をフィジカル・デジタルに分けて検討した。

今年度は、私たちが広報担当となり活動を行った。さらにフィジカルではポストカード・ポスター、デジタルではInstagram及びActivoを追加した。また、フィジカルとデジタルの融合体としてショップカードも取り入れた。また、InstagramにはActivoのURLを、ActivoにはInstagramのURLを記載することでInstagramとActivoで連携を取れるようにした。また、ショップカードや、ポスター・ポストカードにはActivoやInstagramのQRコードを記載し、連携できるようにした。（図1）

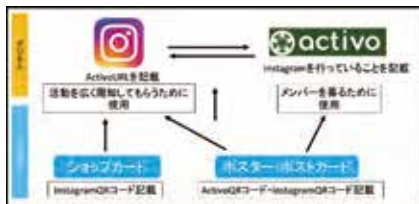


図1 フィジカルとデジタルの関係図

〈まとめ〉

周知活動により、ポストカード・ポスターにより1名入会、Instagramに1名の問い合わせ、Activo農作業用では6名問い合わせ・5名入会、広報用では2名問い合わせ・1名入会という結果だった。よって、20代～50代の計7名の新規参加者を確保でき、メンバーは30人となった。

また、健康農業メンバーにおいて2021年度までは50代以下が2割ほどだったが、2022年度は約半数を占めるようになった。（図2）

健康農業に比較的若いメンバーが増え高齢化が緩和されたことから、世代交代が容易になったのではないかと考える。

今後の課題として、広報担当は現在1人であるため複数人確保する必要があることが挙げられる。健康農業の農業従事者においてはデジタル部門に疎い人が多い。しかし、時限的な措置として農業従事者に担ってもらうことも検討していかなければならない。その場合には、投稿のセンスが問われるInstagramについてはマニュアル作成が必要であると考えられる。



図2 メンバーの属性と推移

謝辞：

本活動にご協力いただいた近江郁子様、健康農業の皆様、広陵町役場の皆様、ポストカード・ポスターの設置にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。



身の回りの外遊び場及び遊び方の変化に関する研究
～京都府山城地区の世代間を対象として～

堀士 修平
Shuhe Horishi

陳ゼミ

〈目的〉

小学生時代といえは、放課後や休みの日には、友達同士など外で多く遊んでいて、小学校や公園などの場所だけではなく、道路や駐車場、空き地、神社などその町の遊べる場所全てを使って遊んでいることが多かった。しかし、近年外遊びをしている子供が減ってきているようだ。千葉大学の木下勇研究室の調査²¹⁾によると小学生の7割以上の人が平日外遊びをしなくなったという調査結果があった。昔の子供と現在の子供の外遊び場はどのように変化したのか、どのようにしたら、外遊びが増える環境になるのか、本研究は京都府山城地区に住んでいる3世代の人を対象として、小学5年生(10歳前後の頃)の外遊び場と外遊び方を調査し、外遊びに供される可能性のある家の前の道路や、近くの空き地、代表的な空き地、公園、校庭などを取り上げ、3世代の外遊び場と遊び方の変化を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

研究対象の3世代は以下のように示す。

第1世代(30～70代の世代)・・・8名

第2世代(20代の世代)・・・20名

第3世代(10代の世代)・・・31名

仮説について、以下2つである。

- ・ 仮説1：第1世代は他の世代に比べて自然の遊び場をより多く利用していた。
- ・ 仮説2：第1世代は他の世代に比べて、「自然の地形や自然の道具を活用した遊び」をしている人が多かった。

調査方法について、第1世代と第2世代にインタビュー調査(20名)を行い、外遊び場のマッピングを実施した。第3世代にアンケート調査(31名)および行動観察調査(20回)を実施した。

〈まとめ〉

第1世代と第2世代の外遊び場について、大きな変化がなかった。しかし、「一番好きな遊

び場」について、第1世代と違い、第2世代の回答は自然の遊び場がなかった。10代の世代は自然の遊び場を一番好きな遊び場だと回答している人もいたが、利用回数が少なかった。以上によって、仮説1は仮説通りの結果となった(表1)。

表1 3世代の1番好きな遊び場

	第1世代 (N=6)	第2世代 (N=12)	第3世代 (N=31)
1 基 本 的 な 生 活	「他者 (1人)」、所 (2人)		
	公園 (2人)、学校 (1人)	公園 (8人)、学校 (1人)、 学園 (1人)	公園 (7人)、 学校 (1人)
	車 (1人)、 歩道橋のスロープ (1人)	家の前 (1人)、 家の前の道 (1人)	友達の家 (1人)、 家の隅り (4人)、 家付の道 (1人)

※緑:自然の遊び場、オレンジ:正規の遊び場、灰色:
非正規の遊び場

道具を使った遊びが第1世代に比べて第2世代、第3世代は増えている。しかし、自然を活用した遊び方が減少している。第1世代～第3世代にかけて道具遊びが豊富になってきたことが調査結果でわかった(表2)。

表2 3世代の遊び方まとめ

[illegible]

※緑:自然を活用した遊び方、オレンジ:道具ありの遊び方、青:ボールを使った遊び方

そのため道具が進化した今、自然を活用した遊び方をする必要がなく道具遊びが主流になっている。以上によって仮説2は仮説通りとなった。なお、観察調査によると、第3世代は車通行量が少ない道路で外遊びを行なったことがあり、家の前にある環境の活用も重要なことだと考えられる。

注1)朝日学生新聞社:小学生8割「外遊びしてません」,
朝日小学生新聞, 2019/7/25



集落の教科書の作成

増井 駿
Shun Masui

清水ゼミ

〈目的〉

人口減少社会において、地方への移住促進は、打開策の一つである。一方で、移住者は「地域のしきたりやきまりごとがわからない」、地域住民は「移住者がしきたりを守ってくれない」などといったトラブルも絶えない。そこで、これらを解決するために考え出されたのが、「集落の教科書」である。2014年、NPO法人テダスの田畑氏が、「良いことも、そうでないことも、ちゃんと伝えたい」をコンセプトに、移住のための地域別ガイドを作成したのが始まりで、これまでに10地域で発行されている。

本研究では、奈良県吉野郡大淀町大岩地区の「集落の教科書」を作成する。

ようとされる方の一助になることを期待している。

謝辭：

集落教科書の作成に当たり、ご協力いただきました
皆様に心よりお礼申し上げます。



写真1 ヒアリング調査風景

〈方法〉

まず、NPO法人テダスが発行している「集落の教科書の作り方」を参考に、掲載項目を選定した。続いて、大岩地区の全住民43名に対して、ヒアリング調査を実施し、編集作業を行なった。(写真1)構成が完成後は住民への確認を行い、製本した。(図1)

〈まとめ〉

大岩地区は、古くからの風習、伝統が残る地域で、区費など慣習により決められていて、明確な根拠が分からないものなどがあつた。(図2) また、大岩地区は全域が市街化調整区域であるため「集落の教科書の作り方」には項目のなかった住まいについてという市街化調整区域ならではのページを記載した。

集落の教科書の作成を通じて、古くから
住む地域住民も理由がわからない慣習は、
移住者にとって理解不可能であることは容
易に推測できた。

今回作成した「集落の教科書」が移住し

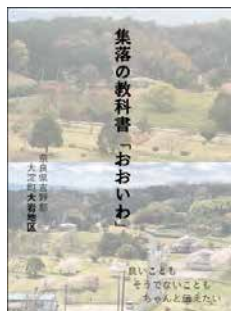


図1 集落の教科書「おいわ」の表紙



図2 P8 区費について



壁紙のテクスチャーに関する研究 —大学生の部屋を例として—

松原 由生
Yui Matsubara

ナゼミ

〈研究目的〉

近年、新型コロナウイルス感染症対策でテレワークや遠隔授業の普及が進み、暮らしのあり方が大きく変わっている。理由としてはコロナ禍における外出自粛の影響で、おうち時間を充実させたい人が増えたことや、在宅でのオンライン授業やオンライン通話の機会が増えたことで、カメラ映えを意識した部屋作りをする人が増えたことが考えられる。現状、日本は無地で白に近い色の壁紙が使用されていることが多い。しかし、消費者は壁紙について常に満足度が高い訳ではなく、消費者の需要をより反映させる必要がある。

本研究では大学生の部屋における壁紙のテクスチャーの評価に着目し、画像による壁紙を床の色と合わせてどのように評価するのかを明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

- ①試料作成:壁紙サンプルはサンゲツのネットカタログから14枚を選定した。部屋の画像は大学生向け賃貸サイトから6畳の部屋を選定し、Adobe Photoshop 2020により床の色を明るい、中間、暗いに変更した。壁紙と部屋を合わせて14の画像試料とした。
- ②被験者実験:19歳から23歳の男女30名(男性15名、女性15名)を対象にスマートフォンにより非対面方式で18対語の感情尺度を用い、SD法により1から5までの5段階尺度でイメージ調査を行った。



図1 アンケートに用いた壁紙の画像試料

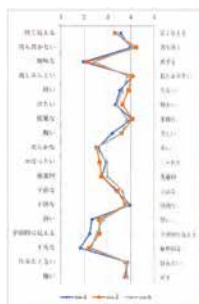


図2 no.4, no.5, no.6におけるイメージプロフィール
(全体-明るい床)

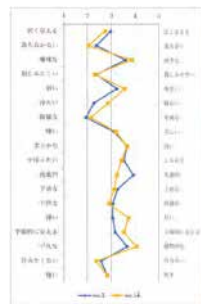


図3 no.3, no.14におけるイメージプロフィール
(全体-明るい床)

〈まとめ〉

画像試料による視覚的評価としてテクスチャーが粗い壁紙では、暗い床に対し男女共に二値化の値(%)が大きくなるほど「住みたくない」と評価する傾向があり、床の色はテクスチャーの評価に影響を与えると考えられる。

女性は壁紙を中心に評価している傾向が見られ、床によって影響されにくい。一方、男性は床によって評価が影響されやすい傾向が見られたため、女性より総合的に評価していると考えられる。

男女共にテクスチャーが細かい壁紙は「住みたい」、テクスチャーが粗い壁紙は「住みたくない」と評価された。また、男女共に全ての床においてテクスチャーが細かい壁紙は「落ち着く」「地味な」「単純な」「快適な」「平凡な」「平面的に見える」と評価され、予備調査の結果から壁紙に対し「落ち着いた空間」が求められていることが明らかになったことから、テクスチャーが細かい壁紙は長く使えて飽きがこないことから「住みたい」という評価に繋がったと考えられる。



Webサイトのメイン画面における利用意向に関する研究

室 二葉
Futaba Muro

李ゼミ

〈目的〉

インターネット上に情報が氾濫している近年、自社の製品を利用してもらうためには、その機能をインターネット上でより効果的に伝えることが求められている。本研究では、IT企業のWebサイトのメイン画面に対し、スマートフォンにおける視覚情報から、第一印象のイメージや画像のデザインから、利用意向がどのように影響するかの関係性について検討を行う。また、ブランド力とデザイン性との関連性を検証する。

〈方法〉

予備調査から選定した12種類の画像試料をスマートフォンにランダムに提示し、SD法(17の形容詞対語で1～5の5段階評価)により、大学生30名(男性15名、女性15名)に評価してもらった。

表1 SD法に用いた対語一覧

つまらない	面白い	複雑的	直感的
難しい	分かりやすい	伝統的	革新的
見にくい	見やすい	遠隔的	近感的
聞き取れない	聞き取りやすい	暗黙的	明示的
信頼できない	信頼できる	自然的	人工的
デザイン性がない	デザイン性がある	暗い	明るい
利用したくない	利用したい	狭い	広い
クラシカル	モダン	古い	好き
非専門的	専門的		

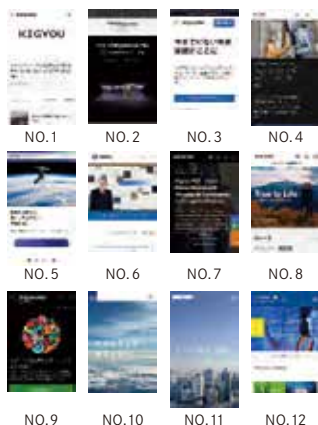


図1 調査に用いた12個の画像試料

〈まとめ〉

主因子法による因子分析の結果から、女性と男性とでは、評価している基準が異なることがわかった。女性は、Webデザインの見栄え(デザイン性)を、男性は、Webデザインからの情報の伝達力を判断基準にしている傾向がある。

心理因子に対する因子得点を目的変数とし、ホームページの構成要素を説明変数としてそれぞれのカテゴリーに分類し、数量化I類による解析の結果、「利用したくない」「利用したい」に大きく影響しているカテゴリーは、偏相関係数の大きさから、男女ともに画像(アイキャッチ)と因子に相関があることが明らかになった。また、画像(アイキャッチ)において、女性は背景色が青色で物や建物の画像を使用している企業を評価し、男性は背景色が黒色で物やイラストを使用している企業を評価していることが明らかになった。

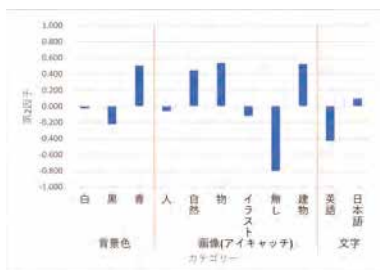


図2 第2因子に及ぼす構成要素の影響(女性)

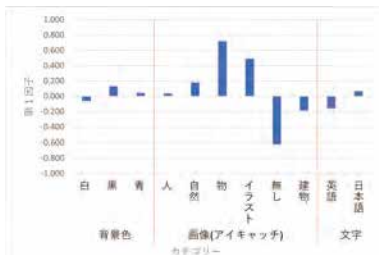


図3 第1因子に及ぼす構成要素の影響(男性)



コミュニティを活かした空き家の適正管理の研究

物部 優香
Yuka Monobe

清水ゼミ

〈目的〉

全国的に人口の減少や超高齢社会の進行に伴い、空き家等が年々増加している中で、適切な管理がなされていない空き家等が防災、衛生、景観面などにおいて多岐にわたる問題を生じさせ、地域住民の生活環境に深刻な影響を及ぼしていることが大きな社会問題となっている。

そこで本研究では下記の二点を目的とする。

- ①地域住民が空き家を見守る仕組みのない地域で地域活動をしていないが興味がある潜在している地域活動者を発掘する。
- ②見守りの実証実験を行い、見守る仕組みを構築し、実証実験後秀逸点と改善点を明らかにし、対象地域での空き家対策を構築することを目的とする。

〈方法〉

- ①潜在している地域活動者を発掘するために、対象地域の住民に対して地域活動への関心を把握するアンケートを実施した。
- ②仕組みの構築のため空き家の管理についての先行研究を調べ、住民主体で空き家見守り活動をしている先進事例にヒアリング調査を行い、それらをもとに空き家を見守り活動の仕組みをつくる。実際に見守り活動の実証実験を行い実施後に空き家を見守りを行う側と空き家の所有者それぞれに対してアンケート調査を行い、仕組みの構築を目指す。

〈まとめ〉

地域住民へのアンケートからは対象地域の「潜在的な地域活動者」が全世代で147人存在し、まだまだ地域活動者を増やすことが可能であることが明らかになった。

現在、人員が不足している若年層にも地域活動に対し興味がある人が存在し、参加

しやすい活動であれば獲得できることが明らかになった。

空き家を見守りの仕組みを構築するために、アンケートをもとに仕組みの改善をし、これからの定期的な案内を送る必要がある。また、空き家を見守りを実施する上で、空き家の対策を行う組織の形成も必要である。今回、実施する予定であった馬見南2丁目と5丁目には、請け負う組織が既に存在していた。今後他の丁で実施する上でもそういった請け負う組織が必要である。

上記の課題を解決することで、住民が主体となって空き家を見守る活動が可能になり、空き家の所有者が地域とつながることに加え、各丁で幅広い地域活動者を獲得し、空き家対策も広報誌等での周知活動を行うことで、地域全体で長期的な空き家の適正管理ができると考えられる。また、その地域で今後空き家になる物件が管理不全になるのを防ぐと考えられる。



図1 仕組みの構築過程

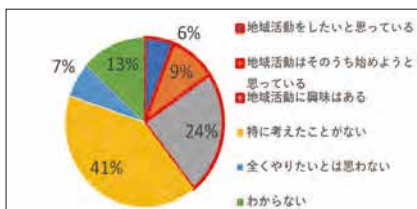


図2 地域活動への関心(活動していない方)SA=382



生駒駅南地区における旧公設市場の位置づけとその建築的特徴

八島 美来
Miku Yashima

前川ゼミ

〈目的〉

本研究は、生駒駅南地区の街区形成過程とその街区形成の起点となる施設の形成史、建築的特徴について明らかにすることを目的とする。具体的には、大正12年に開設されたとみられる公設市場（以下、旧公設市場と呼称する）が街区形成の起点になっていることが分かったため、旧公設市場が生駒駅南地区にもたらす役割や建設後の変遷、現在の状況、建築的特徴を明らかにする。また、当初の旧公設市場の復元と、現在まで残り続けている理由について考察することで、その持続のメカニズムを検討し、その価値をも明確にすることを目的とする。

〈方法〉

- ① 既往研究より生駒駅南地区の街路形成史および周辺の宅地開発について整理する。
- ② 上記情報より、生駒駅南地区の街路形成についての変遷マップを作成する。ここには、周辺の各時代の宅地開発もプロットする。
- ③ 生駒駅南地区の街路形成の起点となる施設であった旧公設市場の調査を行う。具体的には、実測調査を行い、現状図面と復元図面を完成させ、旧公設市場の建築的特徴を明確にする。また、土地台帳の分析、所有者のヒアリングを通じて、土地所有の具体的な年代や、旧公設市場の形成および変容過程を明らかにする。



図1 旧公設市場外観(西から)

- ④ 旧公設市場が払い下げとなってから現在までの変遷についてと、大正末期に開設された旧公設市場が現在まで残り続けている理由を、住みこなしの観点から検討し、持続のメカニズムを明らかにする。

〈まとめ〉

以上の調査分析により、旧公設市場の建設後の変遷、現在の状況、建築特徴が明らかになった。

旧公設市場の平面計画はコンパクトであるが、店部分のみならず2階に住居部分を確保し、住居型店舗として効率的な計画が当初よりなされていた。表構えもアーケードの構造と一体的に立面がデザインされ、表構えへの丁寧な検討も窺えた。また、10軒中9軒を残しており、遺存状況が非常に良好であった。内部改造を受けるものが大半だが、軸部は当初を残しており、また複数棟遺存していることから、当初の姿を復元することも可能であった。特にアーケードは良く残り、アーケードと一体で当時の公設市場の雰囲気や今に良く伝える。旧公設市場は大正期の公設市場の状況を知る上で、極めて貴重な建物といえる。さらに、調査経緯を基に当初の公設市場の姿を復元することができた。

また、建設後の変遷を細かに分析することで、旧公設市場の持続のメカニズムの一端が明らかになった。一つ目の理由は、立地条件である。駅前ではなく駅に程近い場所に位置することにより、開発に巻き込まれず、かつ戦後中心となる駅前商店を補完する機能を担うことで持続することができたとみられる。二つ目は、所有者個人の住みこなしである。所有者それぞれのライフスタイルの変化に対して、柔軟に対応できる建築類型であった。三つ目は、旧公設市場内の道路幅が当初より車の通ることができる広さで計画されていた点である。これにより戦後本格化する車社会に対応することができた。



インターネット販売におけるドレープカーテンの見せ方と色彩に関する研究

山本 陽菜
Hina Yamamoto

李ゼミ

〈研究目的〉

近年、新型コロナウイルスの影響による巣ごもり需要の拡大を背景に家具、インテリア用品の販売が例年よりも非常に好調な推移をみせている。そのためインテリア用品などの身の回り品の需要が高まる傾向がみられた。インテリア用品の中でもドレープカーテンは室内空間において大きな面積を占め、空間演出にとって重要な要素の1つである。快適な空間を演出するためにも配置する家具やライフスタイルなどを考慮した上でカーテンを選ぶことが重要である。

また、布地のドレープ性は衣服に生じる皺襲を左右し、古代ギリシャ彫刻や仏像彫刻などでも衣服の美しさの表現上の重要な要素となってきた。

そこで本研究ではドレープカーテンにおいてもドレープ性の有無により対象となるカーテンにおける評価が変化すると仮定しインターネット販売を想定して試料画像を作成しカーテンの見せ方によって評価に影響があるかを明らかにする。また、床の色が変化することによっても商品であるカーテンの印象評価が変わると想定し、各カーテンにおいてインターネット販売におけるイメージ画像について検討する。

〈方法〉

大学生を対象にGoogle Formsを使用しカーテンの嗜好調査を行い、結果より12色の試料を選定しAdobe Photoshop 2020により①カットサンプル(ドレープなし)②チップ画像(ドレープあり)③空間画像(明るい床)④空間画像(暗い床)の4パターンの試料画像を作成。各画像に対しSD法により1から5までの5段階尺度で被験者実験を行った。また、1～5点で総合評価を行った。

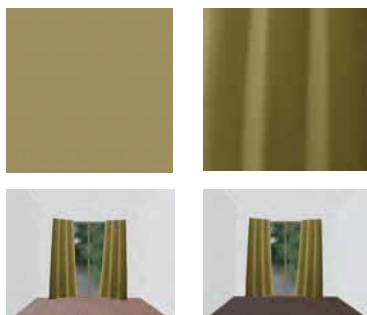


図1 調査に用いた4パターンの試料画像(No.1)

〈まとめ〉

各試料に対する印象を示したイメージプロファイルより、ドレープの有無で比較すると全体的にドレープがある資料(チップ画像)の評価がやや高かった。したがって、インターネット販売におけるカーテンの見せ方としてはフラットな布地を見せるのではなくドレープ性を見せた写真の掲載が適しているといえる。ドレープをかけることで立体感や躍動感が生まれ、色の鮮やかさや、生地の重厚感などより実物に近い正確な商品紹介に効果があるのではないかと考える。また、床の色の明度の違いでは評価にあまり大きな差はみられなかったが、明るい床ではやや評価が悪かった暗い色、濃い色のカーテンの中には、床の色が暗く変わることによって評価が上がるものもあった。これは床の色のトーンとカーテンのトーンが調和し、馴染んだからであると推測する。

これらのことから通販サイトでのイメージ写真を掲載する際は、ドレープ性やカーテンと床の色との調和性を考慮することにより良い提案や商品紹介ができると考えられる。



重ね色目から受ける季節感に関する研究

吉川 理那
Rina Yoshikawa

李ゼミ

〈目的〉

古来より人々は色を区別し、生活の中に取り入れ、そして楽しんできた。特に日本で平安時代中期より完成した「十二単」では着物の重なりで季節を表現し、源氏物語や枕草子にて配色について言及された。同時代には「かさねの色目」と呼ばれる一定の配色一覧が成立した。中でも厚みの異なる2色の布が表裏で重なった配色を「重ね色」と呼び、薄い表地から透ける裏地との兼ね合いで草花や四季を表した。また、全く同じ組み合わせでも季節によって異なる名称で呼ぶこともあり、通年用いられるものも存在する。

僅か2色で季節感を表現し、全く同じ配色にも関わらず季節が変われば名称を変えて用いられた伝統的配色の重ね色の共通点や相違点に着目し、本研究では現代における季節感のイメージとその傾向について検討を行う。すなわち、重ね色に使用された主要色および配色の色相を分析し、現代における色彩に関する評価、その傾向を明らかにする。

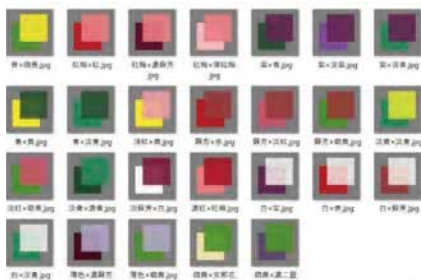


図1 春の重ね色26種

〈方法〉

- ①有職の「かさね色目」に掲載された四季の重ね色と通年使用される重ね色93種を試料として使用した。
- ②93種の重ね色を色相ごとに並べ、同一配色をまとめた83種の重ね色をAdobe Photoshop 2020により背景色を50%のグレーに指定し、透過率10%の表と0%の裏とした試料を作成した。なお、「白色」のみ透過率20%に変更している。
- ③重ね色の表と裏の四季と通用の同一の配色を除いた83種の色差を算出し、35種に絞り込んだ後に背景色を50%と80%で作成した。
- ④Google Formsを利用し「重ね色に関するアンケート」を各調査対象のスマートフォンに送信し、当てはまると感じた四季を選択してもらった。

〈まとめ〉

春をイメージする重ねは紅梅や淡紅、萌黄など明るい色を含む重ねが多く選ばれ、夏には最も票が偏り難く、全体の40%以上と全体の5%未満の票数に絞った際、四季の中で最も数が少なかった。しかし、中褌と瑠璃を含む重ね3種のうち2種が40%以上の票を集めた。秋は赤や紅、濃紅など彩度が高く鮮やかな赤系の色を含む重ねが非常に多く見られた。冬は秋と比べて彩度が低い重ねと白を含む重ねに票が集まった。

故に、画面上で平面的な重ねから現代人に与える季節感は、平安時代の人々と異なり、季節ごとに偏って評価されやすいと明らかになった。



ネット販売における文庫本の表紙に関する研究 —ベースカラーを中心に—

吉田 流奈
Runa Yoshida

李ゼミ

〈目的〉

近年、電子書籍の売上が増加している。電子書籍の普及の理由として、インターネットとスマートフォンの普及が挙げられる。電子書籍をネット上で購入する場合、中身の確認が難しく店頭での購入より情報が少ない。したがって、表紙からの視覚情報を頼りに書籍を購入することが考えられる。さらに、インターネットの普及によって、SNSが幅広く活用されることになり、サイトによる商品の比較・検討において、価格や機能性、操作性に加えて、消費者が注目するデザイン性が大きな評価対象となっていると考えられる。

本研究では文庫本の表紙を用い、表紙全体の中で約7割を占めるベースカラーによって購買意欲に影響があると仮定し、大手ネット販売会社の売れ筋ランキングから文庫本の表紙を画像資料としてベースカラーのみで新たに画像試料を作成し、書籍に関する印象調査やSD法などによる被験者実験を通して購買意欲を中心に検討を行った。

〈方法〉

- ① 売れ筋ランキングから得られた画像資料のベースカラーをAdobe Illustratorで抽出し、ベースカラー、タイトル、作者、出版社のみで文庫本の表紙を作成し画像試料とした。
- ② Google Formsを用いて男女大学生105名に書籍に関する予備調査を行った。
- ③ 予備調査の結果より選定した12の画像試料(図1)をスマートフォンにランダムに提示し評価してもらった。被験者は男女大学生34名に15の評定尺度、5段階のSD法による実験を行った。



図1 作成した画像試料

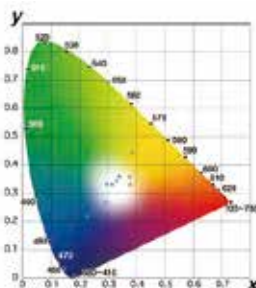


図2 xy色度図における12の画像試料の分布

〈まとめ〉

予備調査の結果より、男女ともに明度が高く彩度が低いものが買いたいと思われ、明度が低いものや彩度が高いものは評価が低い傾向がみられた。SD法による被験者実験から、「印象に残る」の評価が高い試料でも「購入したい」の評価が低いものが多かったことから、印象に残る表紙と購買意欲には関連性がないと考えられる。また、色相に関係なく有彩色で明度が高く彩度が低い試料に対し購買意欲が高く評価された。しかし、無彩色は明度が高くても必ずしも評価が高くなるとは限らない。このことから、ベースカラーのみで文庫本を評価する場合、色相に関係なく明度が高く彩度が低いものが購買意欲を高めることと考えられる。

作業・講評会風景
展示会・ゼミ写真
教員講評

作業風景





講評会風景

論文講評会：2023年1月28日(土) D201 講義室にて

制作講評会：2023年1月29日(日) なごみ食堂にて





選抜講評会

2023年2月10日(金) P201講義室にて 発表者18名

- ◆ 学長賞 堀口 真生
- ◆ 優秀賞 西岡 祐大
- ◆ 優秀賞 門田 真奈



金子 颯汰



後宮 尽我



佐々木 柊真



室 二葉



小柳 なつみ



植山 真智
松村 理菜



吹田 絹果



畠森 初音



西岡 祐大



石田 菜織



曾根 勇弥



福岡 愛実



物部 優香



豊田 純菜



堀口 真生



門田 真奈



八島 美来





Designed by 山田 汐音

たくさんのご来場 ありがとうございます。

卒業研究作品展

2023年3月4日(土)・5日(日)

橿原・大和八木駅前 ミグランスにて





ゼミ集合写真



東ゼミ



林田ゼミ



清水ゼミ



陳ゼミ



前川ゼミ



藤井ゼミ



三井田ゼミ



村田ゼミ



李ゼミ



講評

人間環境デザイン学科の卒業研究選抜発表会に参加しました。研究論文や卒業制作は文字通り本学科で学んだことの集大成です。論文発表では、「建築・まちづくり」、「インテリアデザイン」、「アパレル・造形」の各分野において、自らの問題意識の中からテーマを設定し、着実に調査研究を積み重ねた経緯がわかりやすくプレゼンされていたと思います。また、制作発表では、建築、街並みの設計、衣服など、多彩な作品が展示されていました。これらは4年間の学びの中で、多視点からデザインを考え、各自が試行錯誤のプロセスを経た問題解決の帰結が、卒業制作として結実したものと思います。

人間環境デザイン学科では、幼児から高齢者、障がい者まですべての人にやさしく、使いやすいものづくりの基本「ユニバーサルデザイン」をテーマに、健康で心豊かに生活できる環境を創造する知識と技術の修得に取り組まれています。本学の建学の精神の一つである「美をつくる」を自ら身を持って体現しているのが、本学科で学ばれた皆さんではないかと思います。卒業までに修得した造形に関する専門的な知識やその背景にある文化や諸科学についての総合的な教養を基盤として、今後ともより一層創造的思考を働かせ、日本と世界の文化の創造発展と社会に貢献して頂くことを心より祈念しております。

最後に、卒業までの間、親身にご指導頂いた先生方に感謝申し上げますとともに、今後とも卒業生を温かく見守って頂くことをお願いしまして講評とさせていただきます。

健康科学部長
植田 政嗣

みんな、良く頑張った。

多くの諸君は我々教員の期待を超えてくれた。君たちと過ごしたこの時間を私は忘れない。社会に出て、この頑張った経験を糧にひたむきに前に進んでほしい。我々はいつでも君たちを応援している。

コロナ禍に見舞われて早くも3年が経つ。それが終息する前にウクライナで戦争がはじまった。経済恐慌が起こりそうな予感が蔓延しつつある。まるで、二十世紀の歴史が繰り返されようとしている。社会は変革を求めているのかもしれない。

百七十年前、萩の片田舎の草庵で学んだ若者たちが、封建社会の打倒を叫んで、明治維新へと社会を動かした。彼らの師、吉田松陰が巣立つ若者へ送った言葉が、今も明倫館に残されている。その言葉を君たちに贈りたい。

「今日よりぞ、幼心を打ち捨てて、人に成りにし、道を踏めかし。」

人間環境デザイン学科 学科長
三井田 康記

作品集を手旅立ちの日を迎えている姿を想像しながら原稿を書いています。締め切りや発表前の緊張感の中、自分を追い詰めて必死に考えても得られなかった解が、気を緩めたふとした瞬間に降りてきた経験はありませんでしたか？真摯に課題に向き合っていると、時々そんなご褒美があるのです。卒業研究で培った忍耐強く取り組む姿勢を忘れず、自信を持って巣立ってください。友と過ごしたひとときも大切な思い出にして。

ご卒業おめでとうございます。みなさんが豊かな人生を歩めるよう祈念しています。

人間環境デザイン学科 主任
東 実千代

ウクライナ・少子高齢化・日本経済低迷・コロナ・・・厳しい時代の中で君達はどこか諦めてはいませんか？どうせこの先・どうせ自分など・どうせ自分一人足掻いても・・・正直なところ、多くの作品にはどこかこの諦めが覗いていた気がしました。どうせ卒研など・どうせ自分の力は・どうせ自分に作れるものなど、と。

しかし、本当の絶望は君達若者が諦めてしまった先にやってくるのです。ウクライナ国民は決して諦めはしません。君達もどうか、自分と未来を信じて下さい。

先日逝った松本零士が「さよなら銀河鉄道999」でメーテルに言わせた言葉「若者はね、負けることは考えないものよ。一度や二度しくじっても最後には勝つと信じて。」を、僕からの別れの言葉とします。

また会いましょう、盃片手に。

藤井 豊史

卒業おめでとうございます！

4月から皆さんはプロです。そこには多様な仕事があり、多様なプロが活躍しています。そういう時、皆さんは何を使って仕事に取り組めば良いのでしょうか？

大丈夫です。皆さんには卒業研究があります。

卒業研究で自分の能力が出せたと感じている皆さん。これからは、いつ、どんな時でも、自分の能力をしっかりと出せるよう、地道な努力を重ねてください。「芸は身を助く」です。プロがプロであり続けるということは、「舞台上に立ち続ける」ということです。毎日、稽古していないと、観客に見せられるようなパフォーマンスは絶対に出せません。

卒業研究で自分の能力が出せなかったと感じている皆さん。しっかり反省しましょう。でも、反省しすぎないでください。なぜなら、皆さんがこれから出すパフォーマンスは、きっと周囲を驚かせるからです。「こいつ、こんなことができるんだ!」と。社会人デビュー時点での周囲からの期待や評価が低ければ低いほど、実は気楽です。リラックスして、現時点で持っている自分の能力を最大限に出してみてください。それを地道に続けていけば、いつか、誰かが、「君、あの舞台上に立ってみないか?」と言ってくれるでしょう。

卒業研究で自分の能力を出せた人も、出せなかった人も、皆さんのこれからを決めるのは、地道な努力をするか、しないかにかかっています。

皆さんの未来に幸多からんことを祈っています！

林田 大作

ご卒業おめでとうございます。

あなたは「卒業研究」を精いっぱい頑張りましたか？

私は卒業研究の評価は成果品のみで出来るとは考えていません。

学生時代にはトライ&エラーを繰り返し、回り道をしてでも多くのことを学んでほしいのです。

残念ながら、社会に出ると結果がすべてで、「頑張りました」「過程や工程」は評価の対象にならないことが多々あります。

「タイパ」という言葉が行きかう中、学生時代に「豊かな学びの時間」を経験してほしいと願い指導してきました。

少しでもその学びが、皆さんの人生の糧になりますように。

自分らしく活躍されますように。

応援しています。

村田 浩子

社会の大きな変容の中で、否応なく新たな常識に対応せざるを得ない学生生活でしたね。4年間の集大成を生み出す過程においても、懊悩煩悶しながら日々成長していく姿が印象的でした。今、ここに立っているのは、自分自身に打ち勝った証拠です。

「人を信じよ しかし、その百倍も自らを信じよ」

手塚治虫さんの言葉です。人を信じることは大切なことです。しかし盲目に信じ切るとは、他人に自分を委ねることと同じです。あなたの人生はあなただけのものです。譲れないものがある時は、自分を信じ、心の叫びに耳を傾けてください。そうして、自分だけの素晴らしい人生を創造してください。

清水 裕子

皆さんの卒業研究は、大学時期の集大成としての「終わり」だけではなく、自主的に選んだテーマに取り組んだ原点として「始まり」でもあります。学んだ経験を糧にして、これからも頑張ってください。皆さんの成長と活躍を楽しみにしています。

陳 建中

2組担任として4年間を振り返ってみると新入生としての1年間とコロナ禍の3年間になります。神戸への宿泊研修を覚えていますか？色褪せた昔のことになってしまったかもしれませんが、今や忘れることのできない貴重な思い出です。大変な時間を遅く乗り越えられた皆さんにエールを送ります。それぞれの思いで就活とともに卒業研究に臨み、4年間の集大成として出来上がったモノはこれからの社会人としてもお仕事に活かされることと思います。より一層のご活躍をお祈りします。卒業本当におめでとうございます。

李 沅貞

約1年という長い時間をかけて、大学で学んだ最終成果として、何か一つのものをつくり出す作業は、苦悩の連続だったと思います。指導教官をはじめ、様々な先生からは助言や指導があり、それが助けとなることも、もしくは迷いを生むこともあったでしょう。重要なのは、煩わしさから他者の意見を拒絶したり、もしくはその反対に、他者の意見にすべて身を委ねたりしないことだと思います。

多様な意見や情報を引き受けながら、最後は一人の自分が決断し、つくりあげる、これしかないと思います。思考、決断、実行です。どうぞ楽しい人生を送ってください！

前川 歩

4年間、担任の先生をはじめ多くの人がみなさんを支え、指導し、そして守ってくれました。卒業研究も決して1人ではやり切れませんでしたね。人の為に自分の時間を費やすことは、お互いの信頼関係があってこそ成り立ちます。いつもそばにいてくれた人にまずはありがとうと伝えてください。春からは社会人としてみなさんが人や社会を支える番です。卒業研究で悩んだ時に手を差し伸べてくれた人を思い出しながら、誰かにとって必要不可欠な存在になってください。決して見返りを求めず、充実した時間を過ごせるよう、先生としてそして先輩として、いつまでも応援しています。

小松 智菜美

4年間、お疲れさまでした。

いよいよ4月からは新しい生活が始まりますね。

学生生活で得られた思い出や経験は、皆さんのこれからの人生を歩んでいくために必ず役に立ちます。

社会人への“はじめの一步”大きく歩み出してくださいね。

畿央大学の卒業生として、自信を持って！

新たな道で皆さん一人一人が輝く毎日を過ごせるよう、いつまでも応援しています。

(いろいろとサポートもしてくれてありがとう！すごく助かりました(^^)／★)

中井 千織

畿央大学 健康科学部
人間環境デザイン学科 教員

教授

学部長 植田 政嗣
学科長 三井田 康記
主 任 東 実千代
藤井 豊史
林田 大作
村田 浩子

准教授

李 沅貞
清水 裕子
陳 建中

講師

前川 歩

助手

小松 智菜美
中井 千織

編集委員

中井 千織
小松 智菜美
青木 佑夏
上出 那奈実

油谷 圭輝
今村 水紀
岡村 夢真也
奥山 龍介
川口 蒼真
後久 まどか

高山 凌花
竹嶋 友貴
平岡 初音
平田 晴輝
福井 農人
前野 風香
正岡 凜保
水谷 立命
吉井 亮徳

岩永 匠
清島 有希也
梶浦 佑太
新野 陽菜
辻 愛夏
中谷 天音
松井 華音
山田 汐音
吉田 香葉
綿田 章乃
万字 光
以上

